

**平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡  
発掘調査報告書**

**2 0 2 2**

**株式会社 文化財サービス**



## 例 言

- 1 本書は、京都市中京区西ノ京南大炊御門町 32-32 で実施した、平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡の発掘調査成果報告書である。(京都市番号 21H480)
- 2 調査は、集合住宅建設に伴い実施した。
- 3 現地調査は、開発原因者より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、望月麻佑、菅田 薫（文化財サービス）が担当した。
- 4 調査期間は令和 4 年 6 月 6 日～7 月 8 日である。
- 5 調査面積は 224.0 m<sup>2</sup>である。
- 6 本文・図中で使用した地図は京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「花園」を参考にし、作成した。
- 7 本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高は T.P.（東京湾平均海面高度）である。
- 8 土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。
- 9 本書の執筆は望月が行い、編集は望月、中西佳奈江（文化財サービス）が行った。
- 10 現地での記録写真撮影は望月が行い、出土遺物の撮影は写房 楠華堂（内田真紀子氏）に依頼した。
- 11 調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 12 発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。

〔発掘調査〕 田中慎一、小林一浩、吉岡創平（以上、文化財サービス）、  
作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕 多賀摩耶、吉川絵里、清須慶太、中西佳奈江、森下直子、中 優作、  
場勝由紀菜、井上千乃、上野恵己、西尾知子、内牧明彦  
(以上、文化財サービス)
- 13 自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 14 出土遺物の年代観は、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第 12 号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019 年  
中世土器研究会「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社 1995 年  
に依った。
- 15 図 17 で使用している図面の一部は公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所より、図 18 で使用している『京都惣曲輪御土居絵図』は京都大学総合博物館より、資料・データの提供を受けた。
- 16 現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。  
(敬称略)  
山田邦和（同志社女子大学）、尾野善裕（京都国立博物館）

# 目次

第Ⅰ章 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
3 測量基準点の設置と地区割り	3
4 整理作業・報告書作成	3
第Ⅱ章 位置と環境	
1 位置と環境	5
2 既往の調査	7
第Ⅲ章 調査成果	
1 基本層序	13
2 検出遺構	13
3 出土遺物	23
第Ⅳ章 まとめ	
1 検出遺構について	28
2 右京の人工河川及び御土居濠と地形環境について	32
附章 平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡発掘調査の自然科学分析	38
(パリノ・サーヴェイ株式会社)	

## 図版目次

図版1	遺構	1. 遺構検出後 調査区全景 (西から)
		2. 遺構検出後 調査区全景 垂直写真 (上が北)
図版2	遺構	1. 遺構掘削後 調査区全景 (西から)
		2. 遺構掘削後 調査区全景 垂直写真 (上が北)
図版3	遺構	1. 流路001 完掘状況 (北から)
		2. 調査区南壁 流路001部分 (北から)
図版4	遺構	1. 濠002 石列検出状況 (北から)
		2. 濠002 完掘状況 (北から)
図版5	遺構	1. 溝004・006、土坑009 完掘状況 (北から)
		2. 調査地遠景 (調査地上空より南方 丸太町通・佐井通を望む)

図版6	遺物	1. 流路001 出土遺物
		2. 濠002 出土遺物
		3. 流路003 出土遺物
図版7	遺物	1. 溝004 出土遺物
		2. 溝006 出土遺物
		3. 土坑009 出土遺物

## 挿図目次

図1	調査地位置図 (1 : 2,500).....	1
図2	調査経過写真 .....	2
図3	調査区割・基準点配置図 (1 : 200) .....	4
図4	平安京条坊図 (1 : 80,000) .....	5
図5	平安京内の地形分類図 (1 : 80,000) .....	5
図6	既往調査位置図 (1 : 5,000).....	8
図7	調査区北壁・南壁断面図 (1 : 100) .....	14
図8	調査区東壁・調査区中央部東西断面図 (1 : 100、1 : 80) .....	15
図9	調査区全体平面図 (1 : 100) .....	16
図10	流路001 平・断面図 (1 : 60) .....	17
図11	濠002 平・断・立面図 (1 : 40) .....	19
図12	流路003 平・断面図 (1 : 60) .....	20
図13	溝004・006、土坑009 平・断面図 (1 : 60) .....	21
図14	出土遺物1 (1 : 4) .....	24
図15	出土遺物2 (1 : 4) .....	26
図16	調査地周辺遺構配置図 (1 : 800) .....	29
図17	道祖大路・御土居断面模式図 (1 : 300) .....	30
図18	『京都惣曲輪御土居絵図』と今回の調査地 (1 : 1,500) .....	31
図19	右京河川変遷図 (1 : 20,000) .....	34

## 表目次

表1	既往調査一覧表 .....	10
表2	遺構概要表 .....	13
表3	遺物概要表 .....	23
表4	右京一条～四条人工河川一覧表 .....	33
表5	遺物観察表 .....	37



# 第 I 章 調査の経緯

## 1 調査に至る経緯（図 1）

本調査は集合住宅建設工事に伴って実施された発掘調査である。調査地は京都市中京区西ノ京南大炊御門町 32-32 に所在し、平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡に該当する。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）による試掘調査が行われた。その結果、遺構の存在が確認されたことから、原因者の東レ建設株式会社に対して発掘調査の指導が行われた。発掘調査は東レ建設会社から文化財サービスが委託され、埋蔵文化財調査に関わる事務一切の依頼を平安埋蔵文化財事務所株式会社が受け、文化財保護課の指導のもと実施することになった。

## 2 調査の経過（図 2）

発掘調査は、2022 年 6 月 6 日から現地作業に着手した。調査区は、文化財保護課の指示により、東西短辺 6.0 m、長辺 20.0 m、南北 14.0 m、面積 224.0 m<sup>2</sup>に設定した。近現代盛土を重機掘削で除去したところ、基盤層である灰白色シルト～黄褐色砂礫層を検出した為、その後人力によって遺構成立面の精査を行った。その結果、調査区の東半にて褐色砂礫を埋土とする流路、西半にて灰黄褐色砂泥を埋土とする溝と土坑を検出した。これらの遺構の堆積状況を調べるために、調査区の南端に断割を入れて確認作業を実施した後、遺構掘削を行った。掘削した遺構は写真撮影や測量作業などの記録作業を行った。写真撮影の機材は、35 mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35 mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。調査後埋め戻し作業を行い、7 月 8 日に全ての工程を終了した。

現地調査においては、適宜、文化財保護課の検査および指導を受けた。また、遺構検出段階お



図 1 調査地位置図（1：2,500）



1. 調査区設定（西から）



2. 調査区東側重機掘削作業（南東から）



3. 調査区南壁断割作業（北西から）



4. 流路001掘削作業（南東から）



5. 調査区西側遺構断面実測作業（北東から）



6. 現地説明会実施・円町児童館向け（南東から）



7. 濠002完掘作業・調査区埋め戻し作業（南東から）



8. 調査完了後（南東から）

図2 調査経過写真

よび掘削段階において、文化財保護課が設立した本調査の検証審査員である山田邦和氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言を頂いた。

また、調査期間中の7月1・2日に近隣住民を対象にした現地説明会を行い、普及啓発に努めた。約50名の参加があった。

### 3 測量基準点の設置と地区割り (図3)

測量基準点は、VRS測量により調査地敷地内にM. 1、M. 2を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

M. 1      X = -108,824.573 m      Y = -24,657.945 m      H = 42.054 m

M. 2      X = -108,828.036 m      Y = -24,636.699 m      H = 42.073 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して3mグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。

### 4 整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した望月、編集作業は中西が担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

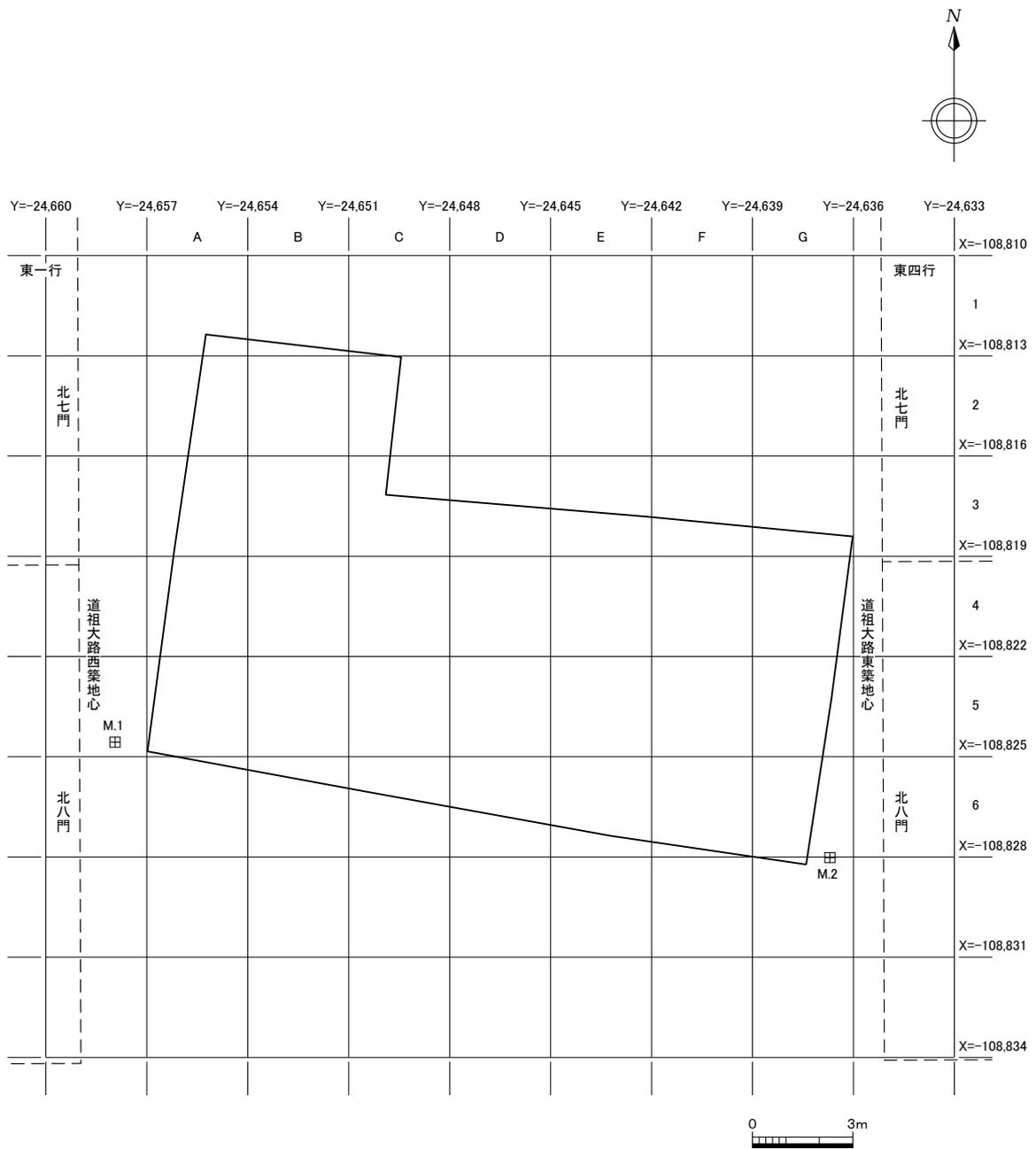


図3 調査区割・基準点配置図（1：200）

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1 位置と環境 (図4・5)

調査地は佐井通と丸太町通の交差点北西側に位置する。平安京の条坊では、調査地の東側が道祖大路、西側が右京一条三坊四町の南東隅に該当する。また、調査地の東側は豊臣秀吉によって築造された御土居の濠部分推定位置にも重なっている。

当地は京都盆地北西部の紙屋川（天神川）によって形成された扇状地帯上に立地している。調査地の東を流れる紙屋川は鷹ヶ峯を源流とし、京都盆地西部を南流して、西ノ京円町を経て流れを西に変え、太秦の南東で御室川に合流した後、再び南流し吉祥院で桂川と合流する。現在のこの河道は昭和十（1935）年の京都大洪水の後に付け替えられたもので、それ以前は円町から南西に流れを変えた後、御池通と佐井通の交差点付近にて南下し、三条通で西へ曲がり、そして西小路（恵止利小路）にて再び南流していた。紙屋川扇状地の扇頂部標高は88 m、扇端部標高は32 mだが、当地は標高42 mを測る。扇端部としては標高が高いが、宅地化以前は水田として利用されており、伏流した水が集う湧水帯が分布する湿潤な土地であることが窺える。

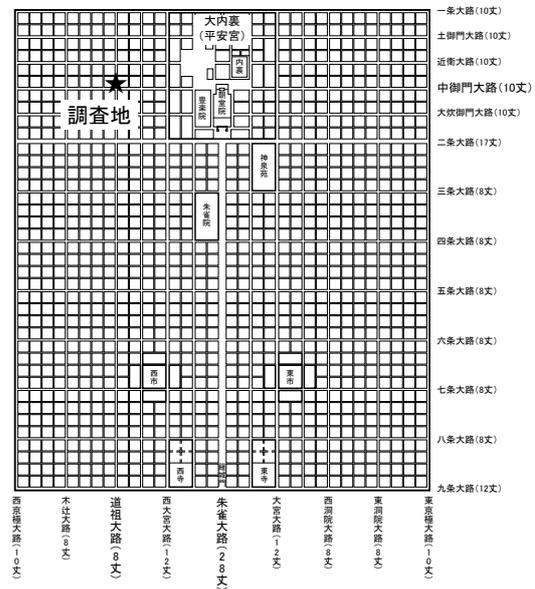


図4 平安京条坊図 (1 : 80,000)

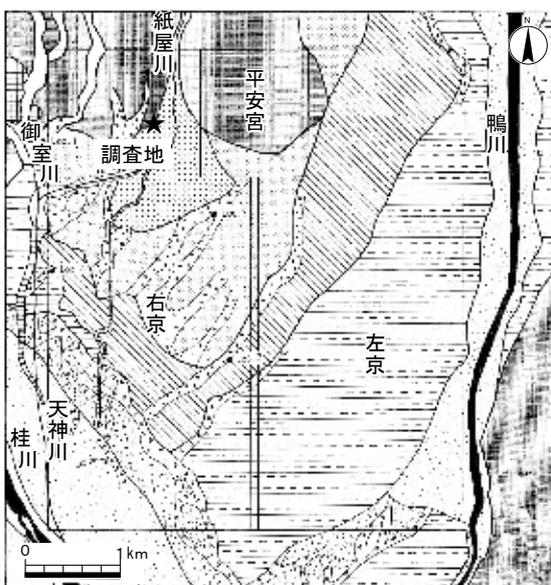
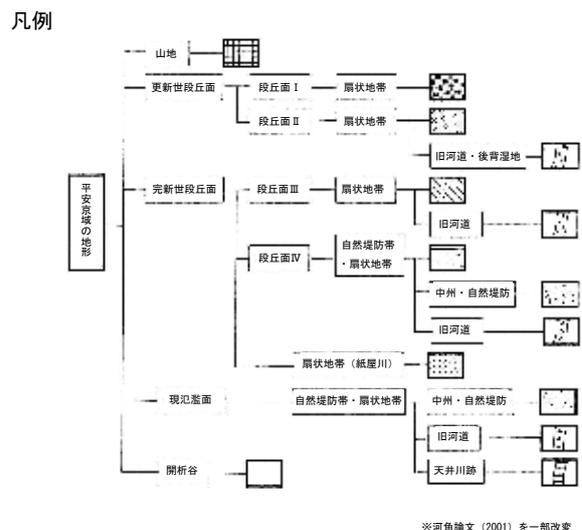


図5 平安京内の地形分類図 (1 : 80,000)



※河角論文(2001)を一部改変

当地は平安京造営以前の遺跡には含まれていない。だが、調査地の西隣に位置する一条三坊五町では弥生・古墳時代の溝が検出されており、調査地の東隣に位置する一条二坊十三町では平安時代の湿地状堆積より弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が出土していることから、若干の活動の痕跡は認められている。調査地の南側には弥生・古墳時代の遺跡である西ノ京遺跡が分布しており、北側にも遺跡範囲が広がっていた可能性がある。

『捨芥抄』西京図によると、右京一条三坊四町は空白地帯である。東隣的一条二坊十三町及び十一・十四町は「叙弘知行」と記載されているが、平安京内の西東に設置された獄舎の一つである右獄（西獄）が十二町には存在しており、その役人が管理していた私領であったと伝えられている。右獄は建久五（1194）年に左右獄囚を関東に送ったことに伴って廃獄となっている。南東に隣接する二条二坊十六町及び九・十町は「大將軍政所民部省」と記されている。もとは民部省の厨町であったが、平安時代後期になると諸司厨町は衰退し、大將軍社領となったが「民部省」と呼ばれていた。北西側に位置する一条三坊九・十町は平安時代初期の寝殿造の原型と言われている大規模な掘立柱建物跡や門跡が確認されており、この辺り一帯は平安時代前・中期において貴族・官吏の宅地として興隆していたことが窺える。中世になると、北野天満宮に奉仕する神人である「西京神人」が存在し、麩作りを生業としていたことが知られている。西京神人は調査地北東側の地域一帯に居を構えていたそうである。

平安京の主要路であった道祖大路は「佐比（佐井）大路」とも呼称される。この別称について、平城京では右京二坊大路が「佐貴路」と呼ばれていた為、平安京で右京二坊大路にあたるこの道路に名を移したという説がある。平安時代以降、右京域では、人工河川の掘削・分流工事が進められていたことが過去の発掘調査によって判明している。平安京造営当初には、鷹ヶ峯を源流とした紙屋川を京内に引き込む為に西堀川がつけられた。西堀川が機能を停止するのは10世紀後半だが、これと相前後して道祖大路にも人工河川が開削されている<sup>(1)</sup>。三条二坊十四町、四条二坊十六町、四条三坊三町などの調査によると、河川は路面東側に掘削されており、12世紀には埋没することが判明している。その後、野寺小路や西大宮大路においても路面部分を掘削し河川がつけられるが、これらは14世紀頃までに埋没する。15世紀以降になると旧紙屋川が開削され、現在の紙屋川が掘削されるまでその河道は固定されていた。

安土・桃山時代、天下統一を果たした豊臣秀吉は京都の町に大規模な都市改造を行っている。御土居もその一環である。外敵の来襲に備える防塁と、鴨川の氾濫から市街を守る堤防の役割を担うものとして土塁を築造し、その外側を濠で囲って、京の町を惣構化した。御土居の西境は一条大路以北まで紙屋川に沿って築造されているが、一条大路以南より南西方向に膨らみ、鷹司小路から春日小路の間は道祖大路まで凸状に突出し、春日小路以南より西堀川小路に沿って南下する。この突出部分は「御土居の袖」と呼ばれている。明治二十五（1892）年仮製図によると、当地周辺にあった御土居の土塁は残存しているものの、濠は埋められ水田と化していたようである。その後、昭和十三（1938）年に創業された京聯自動車の用地になり、昭和四十七（1972）年に京都信用金庫円町支店が設立された。

註

(1) 道祖大路川に関して、『類聚国史』巻八「神祇八 大嘗会」弘仁十四年(823)十月甲辰条によると、淳和天皇が「佐比川」で禊を行ったという記録があるが、この「佐比川」と道祖大路川は別のものである可能性がある。

参考文献

- 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 2001年  
下中邦彦「京都市の地名」『日本歴史地名体系第二七巻』平凡社 1979年  
南 孝雄『平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-23 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013年  
山田邦和「第三章 左京と右京」『平安京提要』財団法人古代学協会・古代学研究所 1994年  
李 銀眞・松平修平『平安京右京四条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-10 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022年

## 2 既往の調査(図6・表1)

調査地周辺では、丸太町通・JR山陰本線沿いを中心に多数の調査が実施されている。今回の調査地である一条三坊四町内では、町内の南西隅にて発掘調査が実施されており、平安時代前・中期の中御門大路北側溝・井戸・流路、中世以降の中御門大路北側溝と耕作溝が確認されている(3)。道祖大路に対する調査は少ないが、調査地の北側で行われた立会調査では、道祖大路川と想定される流路の東肩が検出されている(23)。当地より南に位置するJR山陰本線部分の発掘調査では、道祖大路西側溝とその東側に道祖大路川とみられる流路が見つかった(47-7)。

当地は弥生時代から古墳時代の遺跡である西ノ京遺跡には属していないが、遺跡範囲外である調査地周辺の地点において若干数の遺構が認められている。一条三坊五町の発掘調査では弥生・古墳時代の溝(4・5)、一条二坊十一町の試掘調査では古墳時代の溝(19)、二条三坊七町の発掘調査では弥生時代後期の流路が検出されている(39)。また、調査地の東隣に位置する一条二坊十三町の発掘調査では、平安時代の園池遺構の底面より弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が採取されており(22)、当地付近はその時期より流路或いは湿地状の自然地形を呈していたことが窺える。

平安時代前・中期になると、調査地周辺では多数の遺構が認められるようになる。一条三坊二町の発掘調査では鷹司小路南側溝と建物跡に加え、町内通路(小径)や橋脚跡が検出されており、小径東側溝からは墨書土器が出土している(1)。一条三坊三町の発掘調査では庇付の大規模な掘立柱建物が検出され(2)、一条三坊五町の発掘調査では建物跡・柵列の他、延喜通寶や鉄製鋏先が埋納された祭祀土坑が確認されている(4)。JR山陰本線部分の発掘調査では、中御門大路北築地内溝が検出されている(47-6A)。一条三坊九・十町の発掘調査では寝殿造の原型と言われている大規模な掘立柱建物跡や鷹司小路に伴う門跡・南北側溝が確認されている(13)。一条二坊十一・十二町は試掘・立会調査のみであるが、長年大寶・承和昌寶・隆平永寶が出土した区画溝(19)

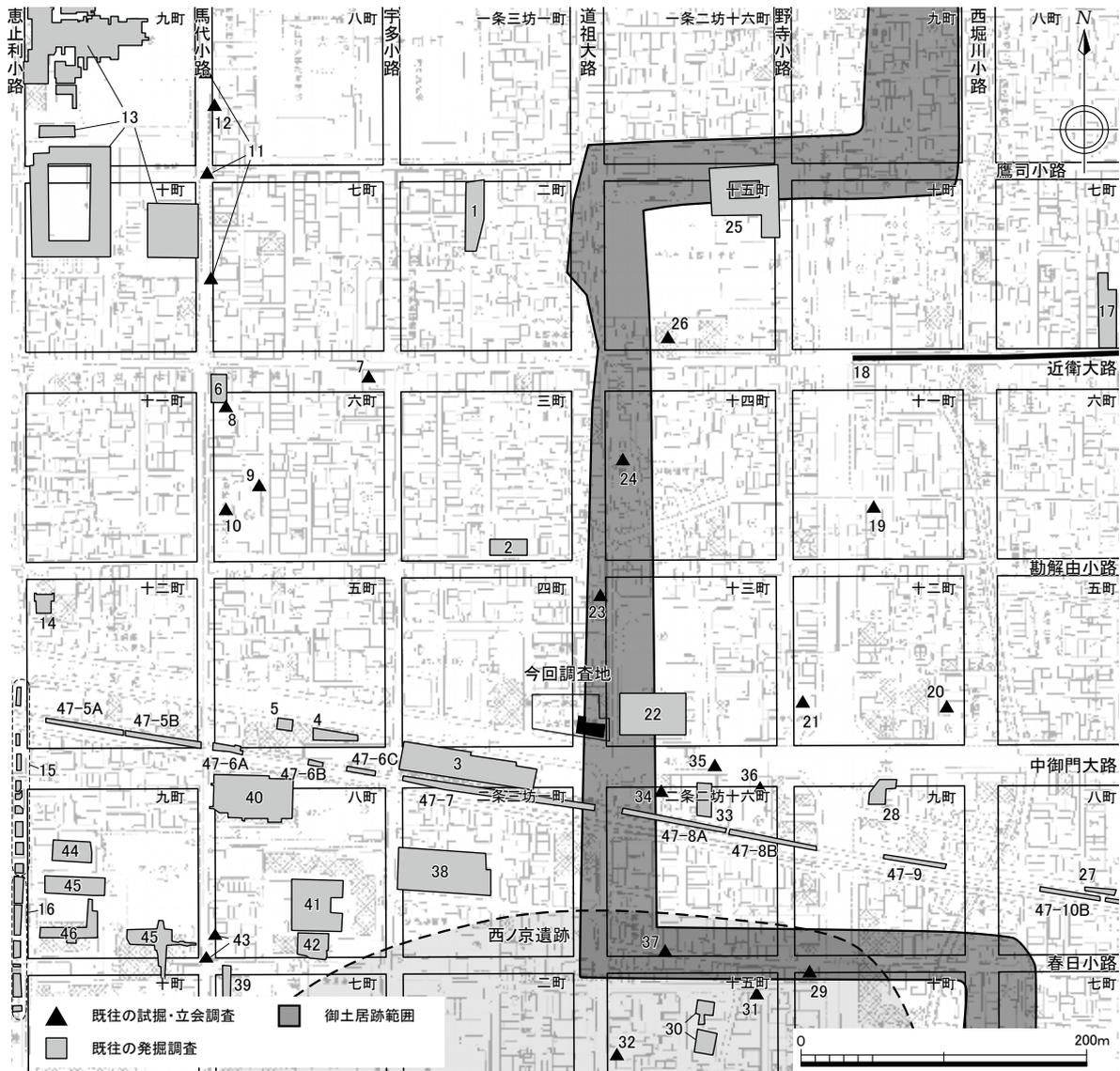


図6 既往調査位置図 (1 : 5,000)

や門扉などの開閉の為に肘金と併せて用いられる肘壺と想定される金属製品が出土した区画溝が建物跡と共に検出されている (20)。一条二坊十三町の発掘調査では庇付建物跡や井戸、園池遺構が確認されており (22)、諸司厨町として発達していた様相が窺える。二条二坊九町から十六町で行われた発掘調査では、野寺小路西側溝が検出されているが、推定位置よりやや東に位置している (47-8B)。二条三坊一町の発掘調査では、多数の庇付建物跡と宇多小路東築地内溝が確認されている他、鉄製鋤先が埋納された祭祀土坑が検出されている (38)。二条三坊七町の発掘調査では春日小路路面と南側溝が認められ (39)、二条三坊八町の調査では建物跡・井戸・祭祀土坑・小径・春日小路北側溝が検出されている他、小径の側溝と春日小路北側溝を繋ぐL字形の溝が見ついている (40・41・42)。二条三坊九町の花園大学キャンパス内で行われた発掘調査では建物跡や井戸、春日小路北築地内溝に加え、方形特殊施設や富壽神寶の銭縷が埋納された祭祀土坑も検出されている (44・45・46)。惠止利小路に該当する地点での発掘調査では、惠止利小路や中御門大路に関する路面遺構の他、築地中心付近にて門跡・橋脚跡が見ついており、門の内側では須恵器壺や

瓶を据え置いた祭祀土坑が2基並んだ状態で検出されている（15・16）。

平安時代後期以降、調査地周辺において宅地関連の遺構は急激に認められなくなるが、一条二坊七町の発掘調査では小規模な建物跡や柵列などが見つかっている（17）。中世になると右京域は耕作地として利用されるようになり、当地周辺においても耕作関連の遺構が多数認められる（1・3・5・6・14・16・19・22・27・28・30・38・40・41・47-5～7）。また、条坊側溝は当該期まで維持されるものも見受けられる（3・16・42）。

御土居に対する調査としては、一条二坊十三・十四・十五町、二条二坊十六町の調査において関連する遺構が検出されている。調査地の東側に隣接する一条二坊十三町の発掘調査では、土塁基底部が検出されている（22）。調査地の北東側に位置する一条二坊十四町での立会調査では土塁基底部（24）、一条二坊十五町にあたる北野中学校校地内で行われた発掘調査では濠の南肩が確認されており、この校地内では現在も土塁の一部が残存している（25）。二条二坊十六町での発掘調査では土塁内溝が検出されている（47-8A）。

表 1 既往調査一覧表

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
1	一条三坊二町	発掘	平安時代の鷹司小路南側溝・区画溝・小径・橋脚跡・祭祀遺構・建物跡・土坑、中世の溝、近世以降の溝・土坑を検出。	『平安京右京一条三坊』『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概報』埋文研 1998年
2	一条三坊三町	発掘	平安時代中期の建物・柵列・土坑などを検出。	『平安京右京一条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-21 埋文研 2007年
3	一条三坊四町、 宇多小路、中御門大路	発掘	平安時代前・中期の中御門大路北側溝、平安時代中期の井戸・流路、中世の中御門大路北側溝・耕作溝を検出。	『平安京右京一条三坊四町』『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2011年
4	一条三坊五町	発掘	弥生時代の溝、平安時代中期の建物・柵列・溝・祭祀土坑・ピット、平安時代中期以降の建物・柵列・溝・ピットを検出。	『右京一条三坊』『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』埋文研 1983年
5	一条三坊五町	発掘	古墳時代の溝、平安時代の建物・柱穴・土坑、室町時代の暗渠、江戸時代の溝を検出。	『右京一条三坊』『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1984年
6	一条三坊六町、 近衛大路、馬代小路	発掘	室町時代の溝・小堤状遺構・土坑を検出。	『平安京右京一条三坊六町跡発掘調査報告書』文化財サービス発掘調査報告書第14集 株式会社文化財サービス 2021年
7	近衛大路	立会	時期不明の土坑、平安時代前期の包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
8	一条三坊六町	立会	平安時代前期の土坑、時期不明の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
9	一条三坊六町	立会	平安時代の包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
10	一条三坊六町	試掘	平安時代の湿地堆積を検出。	『京都市内遺跡試掘調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
11	一条三坊七・八町、 馬代小路	立会	平安時代中期の溝・柱穴・土坑・包含層を検出。	『平安京右京一条三・四坊・五位山古墳』『京都嵯峨野の遺跡-広域立会調査による遺跡調査報告-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 埋文研 1997年
12	一条三坊八町	立会	奈良時代～平安時代前期の溝を検出。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』京都市文化観光局 1980年
13	一条三坊九・十町、 鷹司小路	発掘	古墳時代～奈良時代の建物跡・溝、平安時代初頭～前期の門跡・建物・溝・土坑・井戸、平安時代中期の建物・柵列を検出。	『平安京跡右京一条三坊九・十町の調査』『京都府埋蔵文化財情報』第73号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999年
14	一条三坊十二町	発掘	平安時代の溝・柵列、中近世の池、近世の耕作溝・土坑を検出。	『平安京右京一条三坊九町発掘調査報告』関西文化財調査会 1997年
15	一条三坊十三町、 二条三坊十六町、 中御門大路、恵止利小路	発掘	平安時代の恵止利小路西側溝・中御門大路南側溝を検出。	『平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-4 埋文研 2012年
16	二条三坊十五・十六町、 春日小路、恵止利小路	発掘	平安時代前期の恵止利小路路面・門跡・橋脚・埋納遺構・井戸・柱列・土坑、平安時代中期～中世の恵止利小路西側溝を検出。	『平安京右京二条三坊十五・十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-14 埋文研 2013年
17	一条二坊七町	発掘	平安時代後期の建物・柵列・溝・土坑・ピット、江戸時代の土坑を検出。	『平安京右京一条二坊七町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-31 埋文研 2007年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
18	近衛大路	立会	平安時代～鎌倉時代の近衛大路路面整地層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
19	一条二坊十一町	試掘	古墳時代後期の溝、平安時代中期の溝・土坑、室町時代の土坑・柱穴を検出。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』京都市文化観光局 1980年
20	一条二坊十二町	立会	平安時代前期の溝・建物跡を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
21	一条二坊十二町	立会	平安時代中期の土坑・遺物包含層、時期不明の土坑を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
22	一条二坊十三町、御土居跡	発掘	平安時代以前の湿地状堆積、平安時代の土坑・井戸・柱穴・池・落込、室町時代の溝・柱穴・落込・耕作土層、桃山時代～江戸時代の溝・柱穴・柵列・御土居の土塁基底部を検出。	『平安京右京一条二坊』『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2002年
23	道祖大路、御土居跡	立会	道祖大路川東岸部を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1982年
24	平安京一条二坊十四町、御土居跡	試掘	御土居の土塁基底部を検出。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成30年度』京都市文化市民局 2019年
25	一条二坊十五町、鷹司小路、御土居跡	発掘	平安時代前期のピット・包含層、鎌倉時代～室町時代の溝・土坑・柵列・柱穴、桃山時代の溝、御土居濠の南肩を検出。	『平安京右京一条二坊』『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 1991年
26	一条二坊十五町	立会	平安時代中・後期の濠状遺構を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 1999年
27	二条二坊八町	発掘	平安時代中・後期の園池、近世の耕作土層を検出。	『平安京右京二条二坊(1)』『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2003年
28	二条二坊九町、中御門大路	発掘	平安時代前・中期の土坑、中世以降の土坑を検出。	『平安京右京二条二坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-18 埋文研 2009年
29	二条二坊十町、御土居跡	立会	平安時代中期の土坑・遺物包含層を検出。	『京都市内試掘立会調査概報 昭和60年度』京都市文化観光局 1986年
30	二条二坊十五町	発掘	平安時代前期の井戸・土坑、平安時代中期の建物跡・柵列、鎌倉時代の整地層、江戸時代の耕作土層を検出。始良 Tn 火山灰層検出。	『平安京右京二条二坊(2)』『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研 2003年
31	二条二坊十五町	立会	平安時代前・中期の遺物包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1982年
32	二条二坊十五町	立会	平安時代前期～後期の溝を検出。	『京都市内遺跡立会調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
33	二条二坊十六町、中御門大路	発掘	平安時代の柱穴・土坑・溝・井戸を検出。	『平安京右京二条二坊十六町』京都文化博物館調査研究報告 第14集 京都文化博物館 2000年
34	二条二坊十六町	立会	平安時代後期の遺物包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成14年度』京都市文化市民局 2002年
35	中御門大路	立会	始良 Tn 火山灰層検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 1999年
36	二条二坊十六町	立会	始良 Tn 火山灰層検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局 1999年
37	二条二坊十六町、御土居跡	立会	平安時代後期の遺物包含層を検出。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1981年

	調査位置	調査法	調査成果概要	掲載文献
38	二条三坊一町、宇多小路	発掘	平安時代前・中期の建物跡・柵列・溝・河川・橋脚・土坑・落込、室町時代の耕作溝・土坑・柱穴・河川を検出。	『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研1988年
39	二条三坊七町、春日小路	発掘	弥生時代後期の流路、平安時代の春日小路路面・南側溝、大炊御門大路北側溝・築地内溝を検出。	『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』埋文研2011年
40	二条三坊八町、中御門大路	発掘	平安時代の建物・柵列・溝・土坑・井戸、鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸、江戸時代の土坑を検出。また、調査区西側拡張にて馬代小路東側溝の可能性のある溝を検出。	『平安京右京二条三坊八町附平安京右京一条四坊一・二町』花園大学構内調査報告Ⅶ 花園大学2010年
41	二条三坊八町	発掘	平安時代前・中期の建物跡・小径・溝・土坑、室町時代の耕作溝を検出。	『平安京右京二条三坊八町洛陽総合高等学校校舎建て替えに伴う調査』古代文化調査会2011年
42	二条三坊八町	発掘	平安時代中期の建物跡・柵列・溝、平安時代末期～鎌倉時代の春日小路北側溝を検出。	『右京二条三坊』『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』埋文研1983年
43	二条三坊八町	立会	平安時代中期の春日小路北側溝・南北溝・遺物包含層を検出。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成11年度』京都市文化市民局1999年
44	二条三坊九町	発掘	飛鳥時代の竪穴建物跡、平安時代前・中期の建物跡・柵列・祭祀土坑を検出。	『平安京右京二条三坊九・十町』花園大学構内調査報告Ⅰ 花園大学1984年
45	二条三坊九町	発掘	南東側のトレンチにて平安時代前・中期の方形特殊施設・建物跡・春日小路築地内溝を検出。	『平安京右京二条三坊九・十町』花園大学構内調査報告Ⅳ 花園大学1993年
46	二条三坊九町	発掘	平安時代前・中期の建物跡・祭祀土坑・井戸・土坑を検出。	『花園大学構内調査報告Ⅵ（付 妙心寺庫裡修理に伴う事前調査）』花園大学1998年
47	一条三坊五町・十二町、二条三坊一町、二条二坊八・九・十六町、馬代小路、道祖大路、野寺小路、中御門大路、御土居跡	発掘	一条三坊十二町にあたる5A・5B区にて平安時代前期の園池・溝、平安時代中期の井戸・溝・柵列・柱穴、室町時代～江戸時代の耕作土層、一条三坊五町にあたる6A～6C区にて平安時代中期の中御門大路北築地内溝、平安時代後期の流路、室町時代の耕作溝、二条三坊一町にあたる7区にて平安時代中期の道祖大路西側溝・柱穴、室町時代の柱穴、室町時代から江戸時代の耕作溝を検出。二条二坊十六町にあたる8A・8B区にて平安時代前期の井戸、平安時代中期の井戸・野寺小路西側溝、御土居の土塁内溝を検出。二条二坊九町にあたる9区にて平安時代前期の溝・井戸・石敷遺構、平安時代中期の溝、鎌倉時代の流路、平安時代前期～江戸時代の紙屋川の氾濫堆積を検出。二条二坊八町にあたる10B区にて平安時代中・後期の園池遺構を検出。	『平安宮左馬寮-朝堂院跡・平安京右京一・二条二～四坊』『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』埋文研1999年

埋文研→公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

## 第三章 調査成果

### 1 基本層序（図7・8）

調査地における現標高は、北西部が約42.4 m、南東部が約42.1 mと、現佐井通の方向に向かって緩やかに低くなっている。調査地の基本層序は、近現代盛土と遺構成立面である基盤層のみで構成される。近現代盛土は、調査区東半側では地表面より1.9 m、調査区西半側では地表面より0.8～0.9 mの層厚で堆積し、大正期から昭和期に属する陶磁器片や既存建物の基礎杭の残骸とみられるコンクリート片などを多く包含する。基盤層は4層に区分した。1層は小石・礫を含む黄褐色粗砂層～多量の小石が混じる明褐色シルト層から成る河川堆積層で、調査区の北東から南西に向かって広がる。遺物を含まないことから、平安京造営以前の自然河川の氾濫などによって形成された層と考えられる。また、調査区南壁では噴砂の痕跡も認められる。2層は灰白色～黒褐色粘土層で、粘性が強く有機物を多く含む。湿地状地形に因む堆積層と推定される。なお、2層の花粉分析を行ったところ、最終氷期最寒冷期である約2万～2.5万年前までに消滅したハリケヤキ属が検出された。また、2層より出土した自然木を試料に樹種同定と放射性炭素年代測定を行ったところ、材木はモクレン属の広葉樹で、約4万年前に属することが判明した（附章掲載）。3層は灰白色～明黄褐色シルト層である。粘性が強く、マンガン斑を含みやや赤く発色する。4層は黄灰色粗砂層である。調査区中央部西側においてわずかに堆積が認められる。自然河川の堆積によって形成された層と考えられる。

### 2 検出遺構（図9・表2）

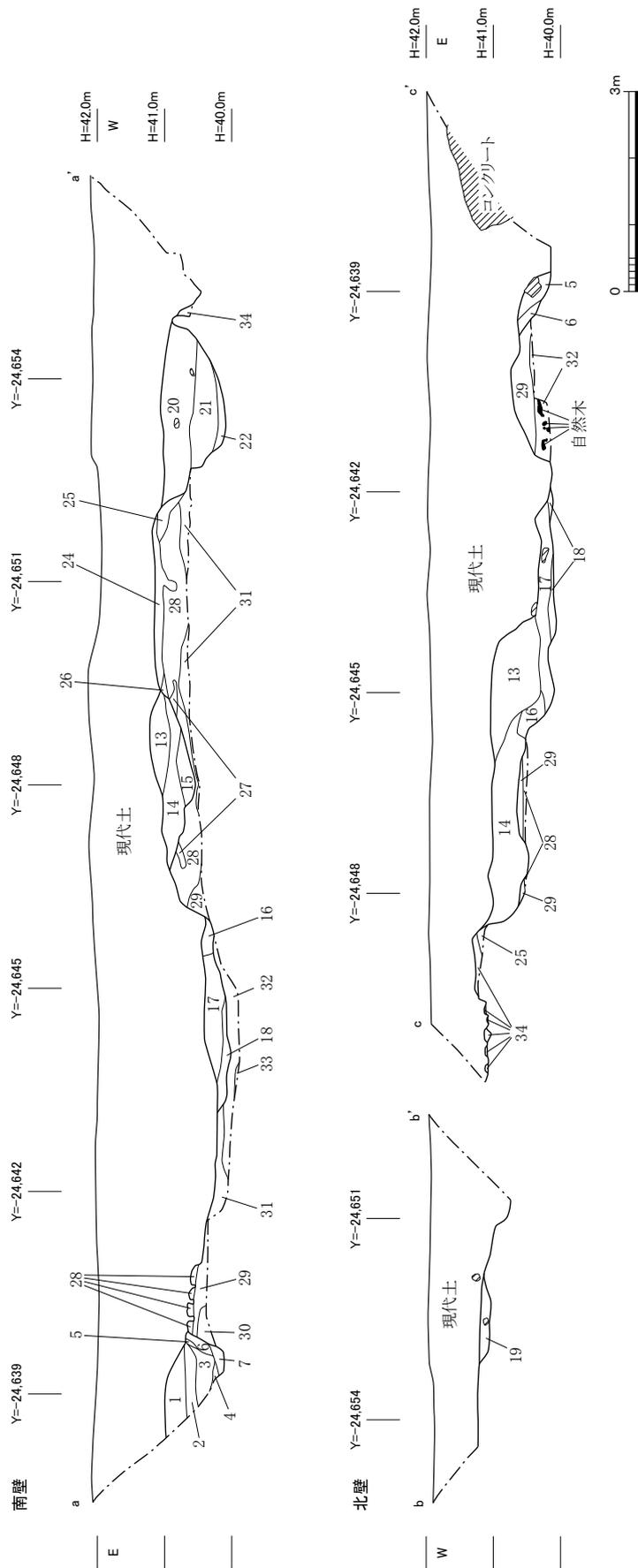
今回の調査では、御土居濠、鎌倉時代から室町時代の流路・溝・土坑を検出した。

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
鎌倉時代～室町時代	流路001・003、溝004・006、土坑009	
桃山時代～江戸時代初頭	濠002	

#### 流路001（図10、図版3-1・2）

調査区の東側で検出された南北方向の流路である。川幅4.9～5.1 m、検出面からの深さ0.3～0.5 m。上半は近現代の攪乱によって大きく削平されており、川底部分のみ残存していた。埋土は上層が大礫混じりの褐色粗砂層、下層がバラス状の小石を多量に含有する黒褐色中砂層で、大雨による河川の洪水によって短期間のうちに埋没したものと考えられる。調査区北壁の断面観察により、流路003の埋土が流路001の上位より西側に溢れ出るように堆積しているのが認められたことから、流路003は流路001より氾濫した土砂が流れた痕跡であると想定される。埋土からは



- |  |   |  |   |
|--|---|--|---|
| <p>1 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂+小石</p> <p>2 7.5YR5/3にふい褐色砂利+小石+シルト</p> <p>3 2.5YR5/2灰赤色砂利+細砂</p> <p>4 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂+小石 マンガン多量含</p> <p>5 2.5Y6/2灰黄色中砂</p> <p>6 10YR4/1褐色粘質土</p> <p>7 2.5Y3/2暗灰黄色粗砂 [濠002埋土(石列設置前)]</p> <p>13 2.5Y3/2暗灰黄色粗砂+小石 マンガン多量含</p> <p>14 10YR4/6褐色粗砂+大礫</p> <p>15 2.5Y3/1黒褐色粗砂+大礫</p> <p>16 2.5Y3/1黒褐色粘土 土器粒混</p> <p>17 7.5YR4/6褐色粗砂+大礫+小石 マンガン多量含</p> <p>18 2.5Y3/1黒褐色中砂 パラス化した小石多量混</p> <p>19 10YR4/2灰黄褐色砂泥 小石多量混 土器混 マンガン含</p> <p>20 7.5YR4/4褐色粗砂+大礫</p> <p>21 10YR4/6褐色砂利+小石+粗砂</p> <p>22 10YR4/2灰黄褐色粗砂</p> | <p>[濠002埋土 (石列設置後)]</p> <p>[濠002埋土 (石列裏込土)]</p> <p>[流路003埋土]</p> <p>[流路001埋土]</p> <p>[溝004埋土]</p> | <p>24 10YR5/6黄褐色粗砂+小石+礫</p> <p>25 10YR6/6明黄褐色シルト+小石</p> <p>26 10YR5/1褐灰色シルト</p> <p>27 10YR4/6褐色砂利(噴砂)</p> <p>28 2.5Y7/1灰白色シルト+10YR6/6明黄褐色シルトの互層</p> <p>29 10YR6/2灰黄褐色中砂+10YR5/3にふい黄褐色中砂</p> <p>30 7.5YR5/6明褐色シルト+小石 マンガン多量含</p> <p>31 2.5Y7/1灰白色粘土</p> <p>32 10YR3/1黒褐色粘土</p> <p>33 5Y7/1灰白色シルト 2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック多量混</p> <p>34 10YR7/1灰白色シルト+10YR6/6明黄褐色シルト</p> | <p>[基礎層 1層]</p> <p>[基礎層 2層]</p> <p>[基礎層 3層]</p> |
|--|---|--|---|

※土色は調査区東壁と共通

図7 調査区北壁・南壁断面図 (1:100)

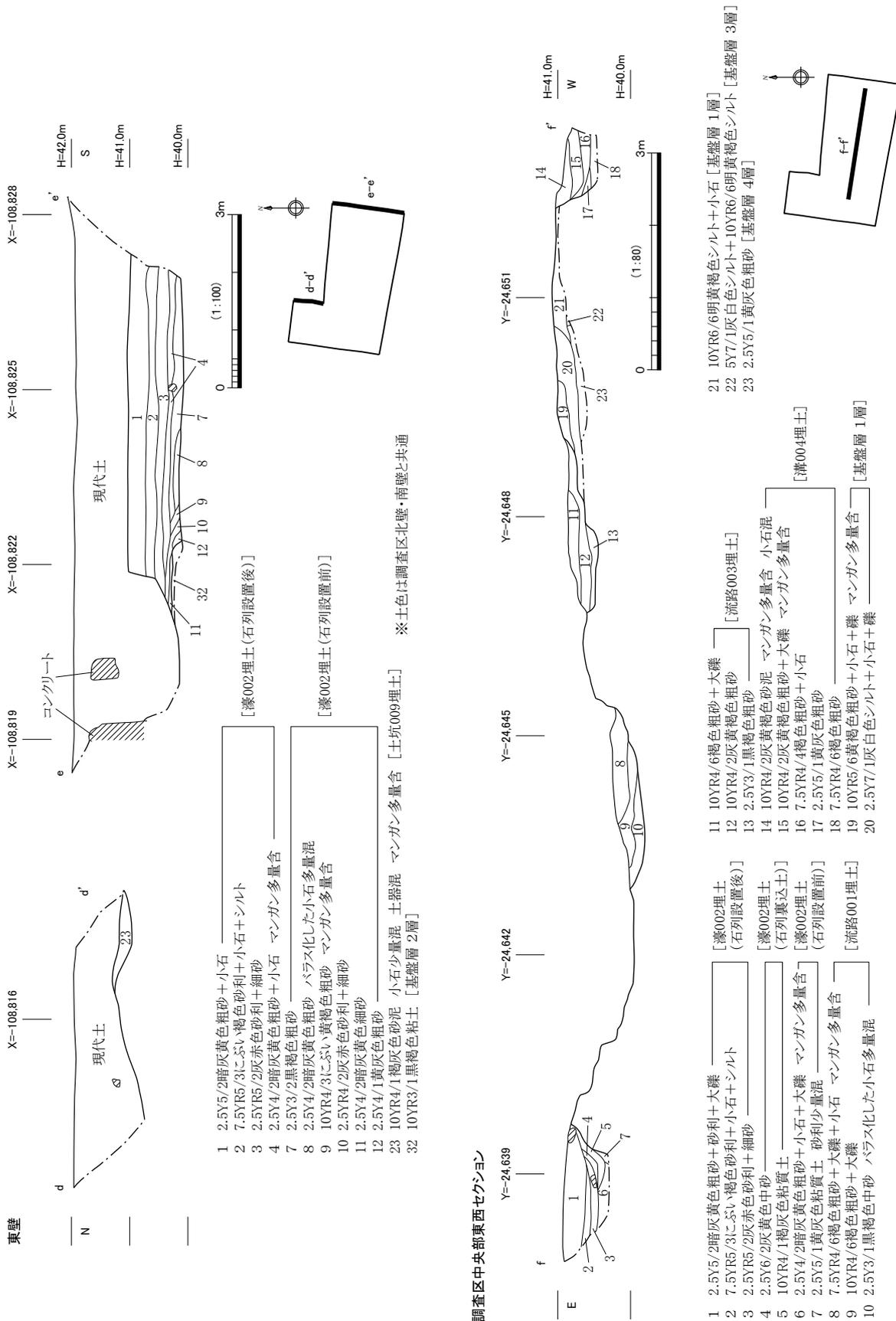


図8 調査区東壁・調査区中央部東西断面図 (1:100、1:80)

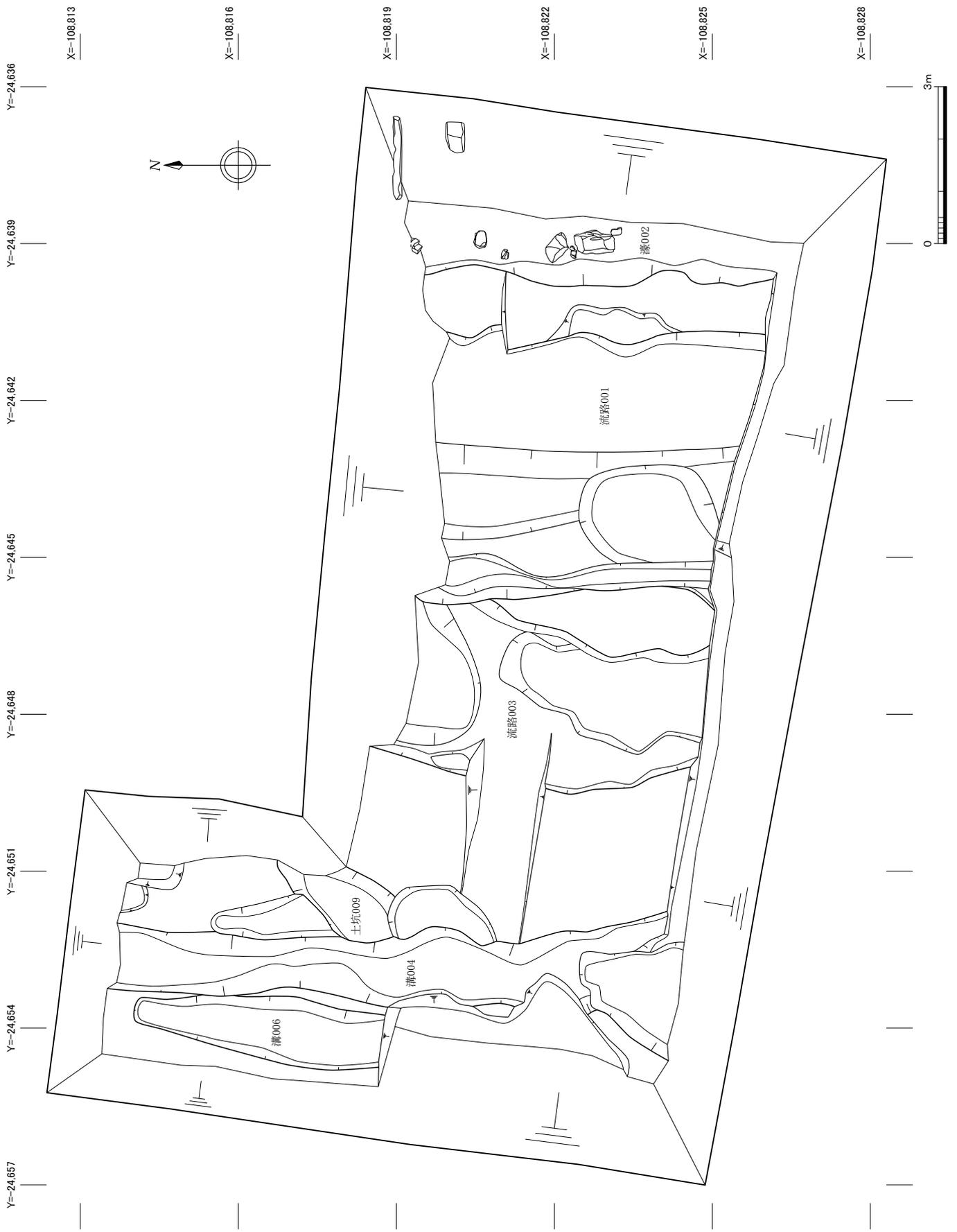
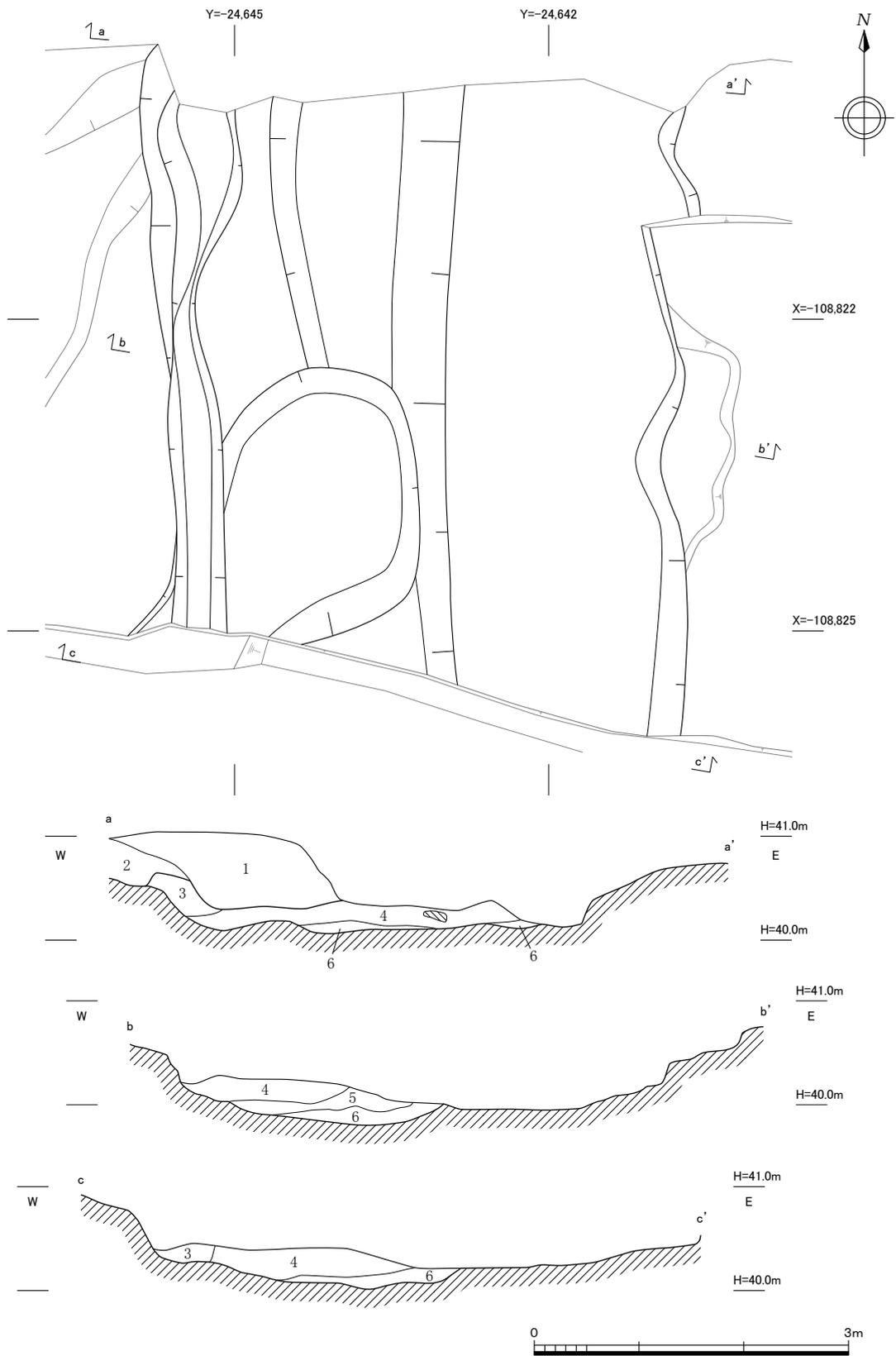


图9 調査区全体平面図 (1 : 100)



- |   |                            |           |
|---|----------------------------|-----------|
| 1 | 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂+小石 マンガン多量含   |           |
| 2 | 10YR4/6褐色砂利+大礫+粗砂 マンガン多量含  | [流路003埋土] |
| 3 | 2.5Y3/1黒褐色粘土 土器粒混          |           |
| 4 | 7.5YR4/6褐色粗砂+大礫+小石 マンガン多量含 | [流路001埋土] |
| 5 | 10YR4/6褐色粗砂+大礫             |           |
| 6 | 2.5Y3/1黒褐色中砂 バラス化した小石多量混   |           |

図10 流路001 平・断面図 (1:60)

鎌倉時代の土師器皿、東播系須恵器鉢、瓦質土器羽釜や室町時代の信楽捏鉢、常滑甕、丸瓦などが出土している。道祖大路東側に設けられた人工河川（道祖大路川）と推定される。なお、東肩部分にて杭列を検出していたが、この杭を試料に放射性炭素年代測定と樹種同定を行ったところ、材木は針葉樹のスギで、現代に属することが判明した。杭列は既存建物の基礎列付近にて検出されたことから、昭和四十七（1972）年の京都信用金庫建設工事の際に打ち込まれたものと考えられる。また、流路001の埋土下層の花粉分析を行ったところ、基盤層からの二次堆積によるものが大部分を占めていたものの、イネ属の花粉が少量検出されており、当時の耕作地化が進展する植生を反映していると想定される（附章掲載）。

#### 濠 002（図 11、図版 4－1・2）

流路 001 の東側を南北方向に走る。西肩部分のみ検出し、東肩は調査区外になるが、濠の推定位置と出土遺物の年代から御土居濠と推定した。検出幅 2.4 ～ 3.3 m、検出面から深さ 0.7 ～ 0.9 m で底面を確認している。底面より約 0.2 m 上にて南北方向の石列が検出されたが、調査区北壁の断面観察より西肩との間に裏込土の充填が認められたことから、護岸の為に設置されたものと考えられる。石列は Y = -24,639 の軸沿いに調査区北端から並ぶが、X = -108,824 以南は検出されなくなる。ただし、調査区南壁にも裏込土の堆積が確認されることから、抜き取られたものと考えられる。石列は暗灰黄色～黒褐色粗砂層によって一度埋没してから据え付けられており、裏込土より江戸時代初期の古伊万里の青磁皿が出土していることから、その時期に設置されたものと想定される。石列設置後の埋土は大礫混じりの灰赤色～にぶい褐色の砂利層で、その中より室町時代の輸入青磁椀や江戸時代初期の古伊万里の白磁が出土していることから、設置後も程なくして洪水によって埋没してしまったものと考えられる。

#### 流路 003（図 12）

流路 001 の西側を南北方向に走る流路である。川幅 2.1 ～ 3.3 m、検出面からの深さ 0.4 ～ 0.7 m。埋土は大礫混じりの褐色砂利層～黒褐色粗砂層で、大雨による河川の洪水によって短期間のうちに埋没したものとみられる。底面に起伏があり、基盤層である灰白色シルト層を勢いよく削りながら水が流れたものと考えられる。調査区北壁の断面観察により、流路 003 の埋土が流路 001 より西側に溢れ出るように堆積しているのが認められたことから、流路 003 は東隣にある流路 001 から越水した水流の痕跡と想定される。埋土より鎌倉時代の土師器皿、東播系須恵器鉢、青磁椀などが出土している。

#### 溝 004（図 13、図版 5－1）

調査区の西側で検出された南北方向の溝である。溝幅 0.8 ～ 2.7 m、検出面からの深さ 0.15 ～ 1.0 m で、北から南にかけて幅・深さとも急激に広がる。溝の軸は真北より約 8° 東に振れる。埋土は上層が灰黄褐色砂泥層、下層が灰黄褐色～褐色砂礫・粗砂層で、その中から鎌倉時代末期

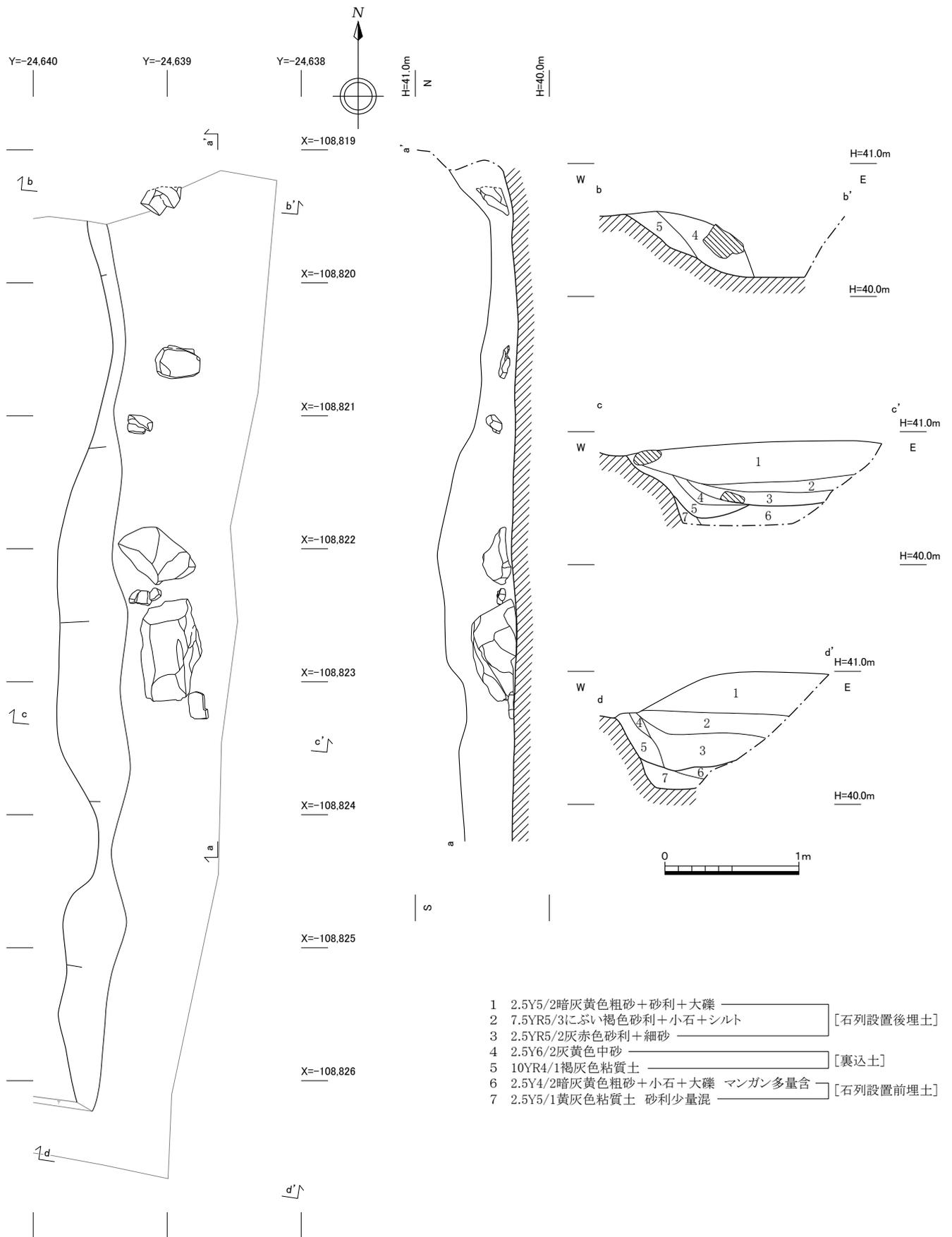


図11 濠002 平・断・立面図 (1 : 40)

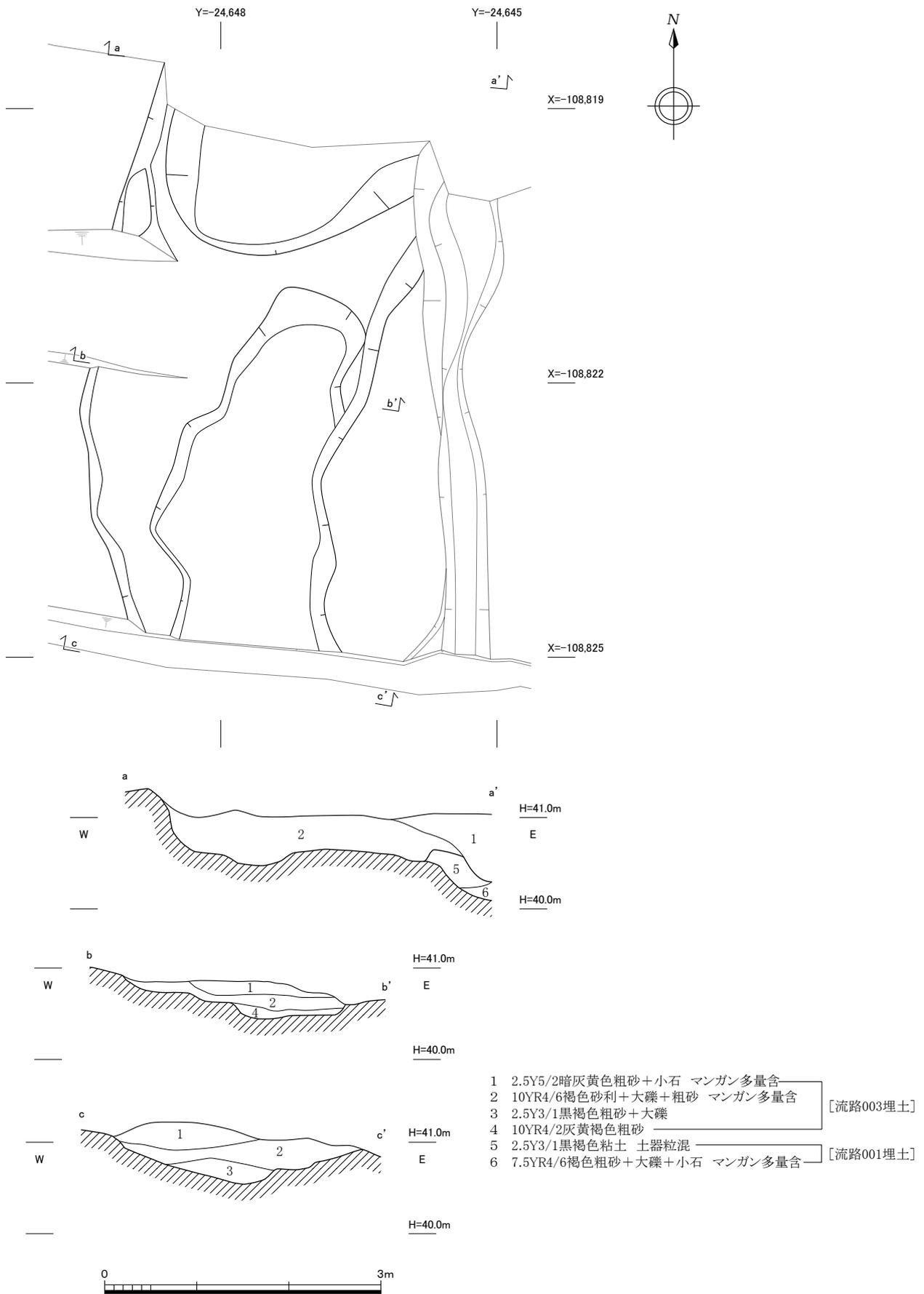


図12 流路003 平・断面図 (1 : 60)

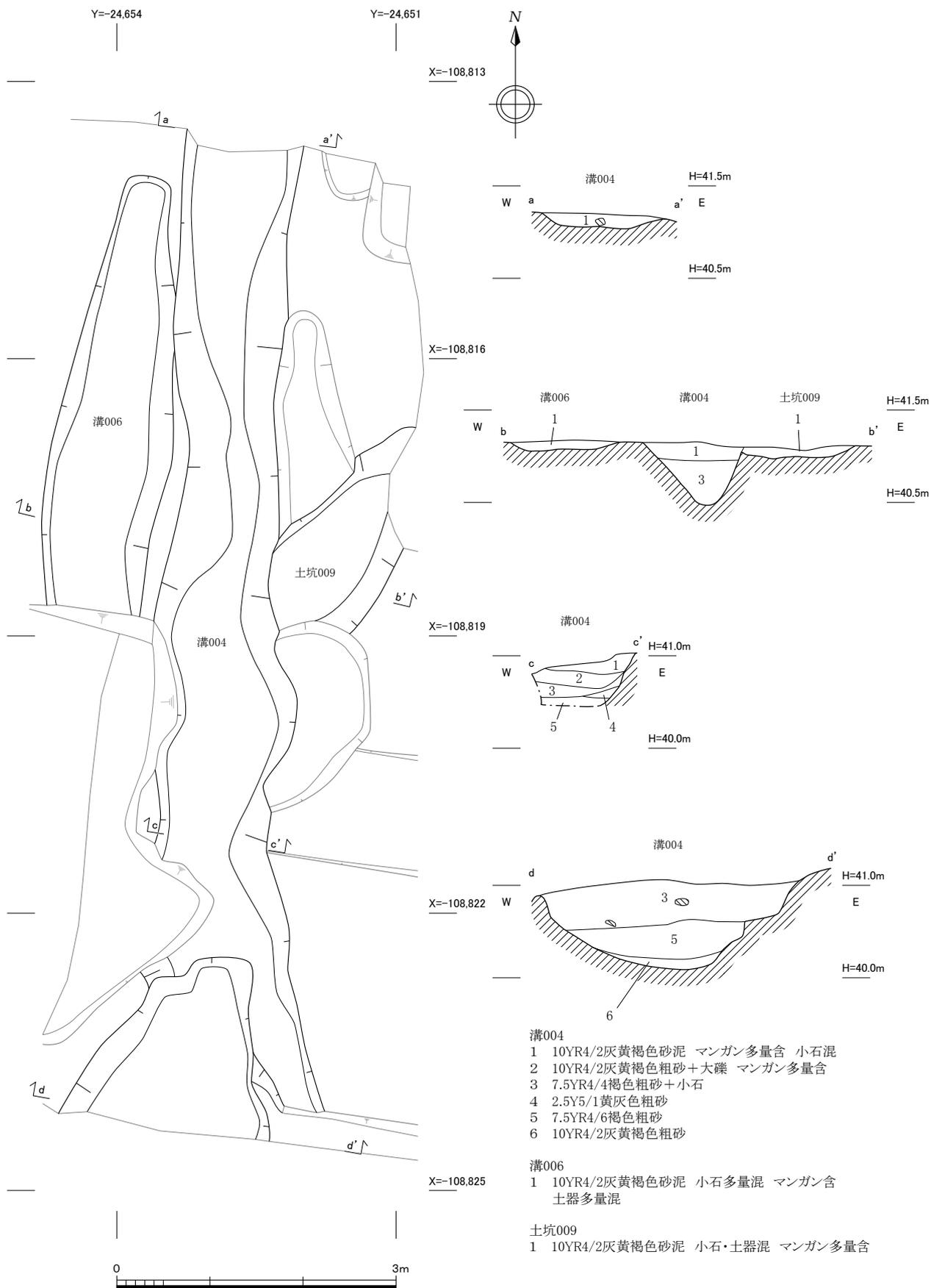


図13 溝004・006、土坑009 平・断面図 (1:60)

の土師器皿や室町時代以降の信楽焼の破片などが出土した。この遺構の形状について、溝の底面壁がオーバーハングしている部分も認められたことから、大雨によって増水した川の水が基盤層である灰白色シルト層を勢いよく削りながら流れたものと考えられる。調査地の南側にて実施されたJR山陰本線複線化に伴う調査(47-7)では、今回検出された溝と同一とみられる南北方向の溝が検出されている。当該調査では道祖大路西側溝と推定されていたが、溝の軸が大きく振れており、『延喜式』に基づいた条坊の推定位置より約3m東に寄っていることから、条坊側溝の可能性は低いと考えられる。耕作溝と推定される。

#### 溝 006 (図 13、図版 5-1)

溝 004 の西側で検出された南北方向の溝である。溝幅は 0.5 ～ 1.3 m、検出面の深さは 0.1 m で、溝 004 と平行するように走る。埋土は小石混じりの灰黄褐色砂泥層である。平安時代前・中期の遺物が多量混入しているが、鎌倉時代末期の瓦質土器羽釜が出土している。溝 004 と同じく、耕作溝と推定される。

#### 土坑 009 (図 13、図版 5-1)

溝 004 の東側で検出された不定形の土坑である。埋土はマンガン斑を多量に含む灰黄褐色砂泥層で、中より平安時代前・中期の遺物が多量出土したが、平面検出において溝 004 との切り合い関係が判別できなかったことから、同時期に埋没したものと考えられる。基盤層である灰白色シルト層を採取する為の土取り穴と見られる。

### 3 出土遺物

遺物はコンテナ7箱分出土した。土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、瓦が出土している（表3）。御土居濠より江戸時代初頭に属する遺物、それ以外の遺構より鎌倉時代から室町時代に属する遺物が出土したが、平安時代前・中期に属する遺物も多く混入していた。

表3 遺物概要表

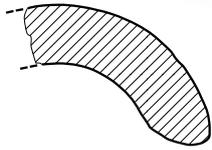
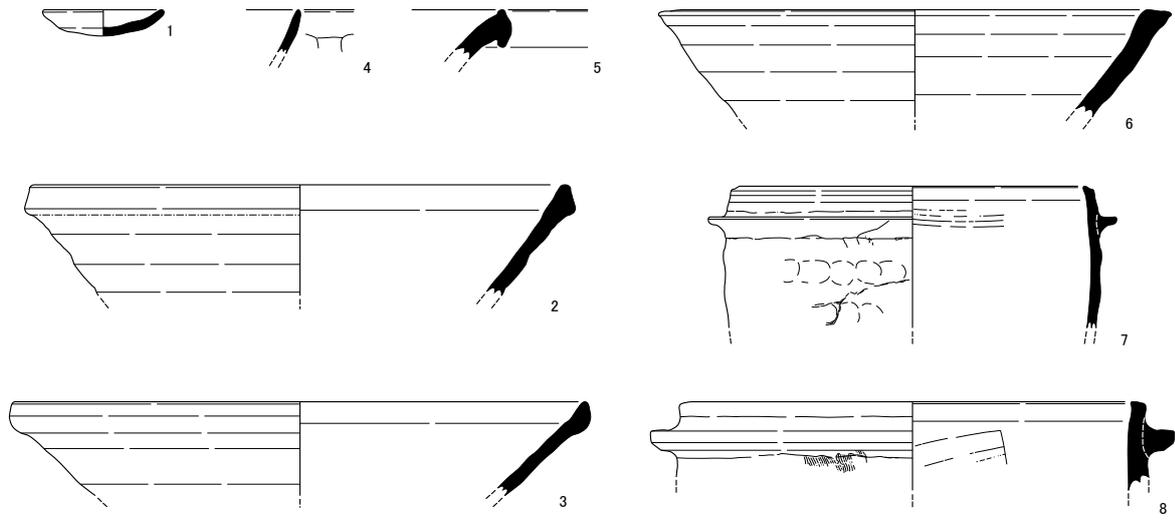
時代	内容	コンテナ数	A ランク点数	B ランク点数	C ランク箱数
平安時代前・中期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁		土師器2点、須恵器5点、緑釉陶器3点、灰釉陶器2点、青磁1点		
鎌倉時代～室町時代	土師器、須恵器、瓦質土器、焼締陶器、青磁、瓦		土師器3点、須恵器3点、瓦質土器3点、焼締陶器4点、青磁3点、瓦2点		
江戸時代初頭	青磁、白磁		青磁1点、白磁1点		
合計		5箱	33点（2箱）	0点	3箱

\* コンテナ箱数は、整理段階で2箱減少した。

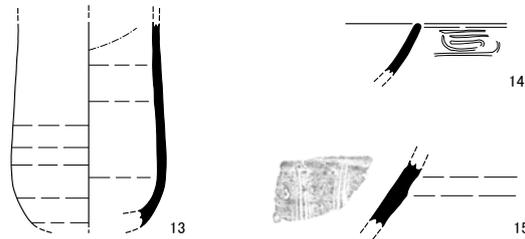
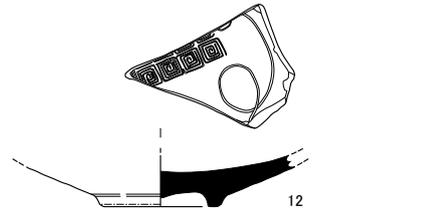
#### 流路 001（図 14、図版 6-1）

1は土師器の皿Nである。口径6.2cm、器高1.4cmと小型品である。7A段階に属し、13世紀後半に比定される。2・3は東播系須恵器の片口鉢である。2は口径27.9cm、3は口径30.0cmを測る。何れも体部から口縁部にかけて直線的に外方へ立ち上がり、口縁端部は上方に拡張して「く」の字状になる。12世紀末から13世紀初頭のものと考えられる。4は龍泉窯系青磁碗である。口縁部は丸みを持って立ち上がり、口縁端部は上方に突出して仕上げられている。透明感のある青緑色の釉薬が全面に施されており、外面には蓮弁文の痕跡が見受けられる。南宋時代のもので、13世紀の所産か。5は常滑甕の口縁部である。口縁部縁帯が上下方に拡張し、断面はN字状を呈する。13世紀後半に属する。6は信楽の捏鉢である。口径34.4cmで、口縁端部は平たく仕上げられる。14世紀の所産か。7・8は瓦質土器の羽釜である。7は口径18.2cm。薄手のつくりで、体部が直線的に立ち上がり、口縁部にてやや内湾し、口縁端部は平たく仕上げられる。口縁部付近には短い鏝が貼り付けられる。体部外面にはオサエの指頭痕が残り、内面はハケのちナデで調整が施されている。13世紀のものと考えられる。8は口径23.0cmで、胎土に砂粒を多く含んだ土師質焼成である。厚手のつくりで、体部外面にはハケ調整、内面には板ナデ調整が施されている。9は丸瓦である。凸面にはタテ方向のナデ調整が施され、凹面には布目圧痕と吊り紐の痕跡が明瞭に認められる。14世紀以降のものと考えられる。平安時代の混入品も出土している。10は須恵器の小壺である。底径3.4cmで、倒卵形の体部を持ち、底部は下方へわずかに突出した平底である。底面には回転糸切痕を残す。11は長沙窯系青磁碗である。高台径10.0cmで、蛇の目高台をもつ。黄褐色がかかった釉薬によって内面が施釉され、見込み部分には目跡が残る。外面体部が露胎し、白化粧の垂れた痕が付着している。10・11は9世紀代に属する。

流路001



濠002



流路003

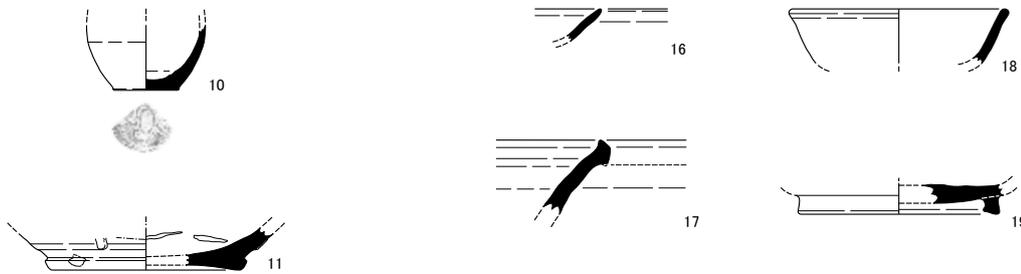


图 14 出土遺物 1 (1 : 4)

#### 濠 002 (図 14、図版 6-2)

12 は古伊万里青磁の皿である。大皿と推定されるが高台径が 6.0 cm と比較的小さい。内面見込みには雷文と劃花文が施文されている。透明感のある青緑色の釉薬が全面に施されているが、高台の接地部分の釉薬は拭き取られており、高台内面には砂が付着したままである。13 は古伊万里白磁である。底部は丸みを帯びており、体部は直線的に立ち上がる。内面上端には釉薬の付着が認められる。何れも 17 世紀前半に属する。14 は龍泉窯系青磁碗である。深緑色の釉薬が全面に施されており、口縁部外面には雷文が施文される。明時代のもので、15 世紀半ばから 16 世紀半ばのものと考えられる。15 は信楽の播鉢である。内面に 5 条 1 単位のすり目が施されている。16 世紀前葉から中葉の所産と見られる。12 は石列の裏込土、13・14 は石列設置後の埋土、15 は石列設置前の埋土から出土している。

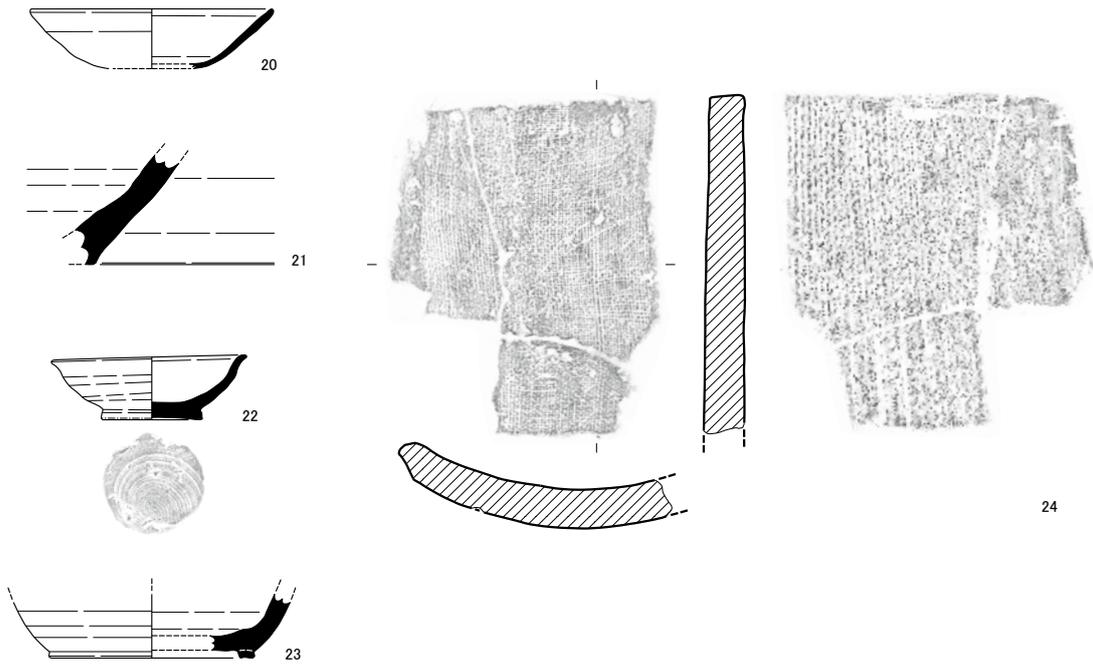
#### 流路 003 (図 14、図版 6-3)

16 は土師器の皿 N である。小片のため口径を復元できなかったが、小型品と見られる。7 A 段階に属し、13 世紀後半に比定される。17 は東播系須恵器の片口鉢である。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上下方に拡張している。13 世紀前半から後半のものと考えられる。18 は龍泉窯系青磁の碗である。口径 11.2 cm。無文で、口縁部はやや外反し、青緑色の釉薬が全面に施されている。南宋時代のもので、12 世紀中頃から後半の所産か。19 は平安時代の混入品で、灰釉陶器の碗である。高台径 10.2 cm。高台が外にわずかに開く角高台で、高台内外面ともハケによる施釉が施されている。黒笹 14 号窯段階のもので、9 世紀前半に比定される。

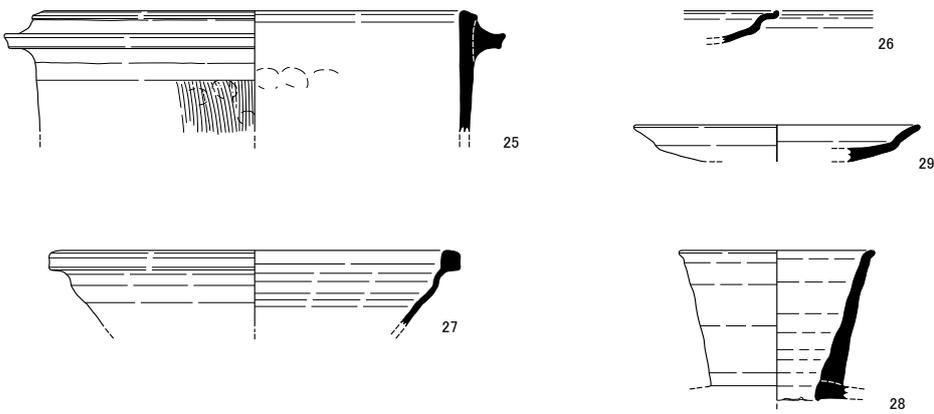
#### 溝 004 (図 15、図版 7-1)

20 は土師器の皿 S である。口径 12.7 cm、器高 3.1 cm を測る。体部が直線的に外方へ立ち上がり、口縁部がわずかに開く。8 A 段階に属し、14 世紀後半に比定される。21 は信楽の鉢の底部である。すり目が認められないが、下部のため使用による摩耗で消滅した可能性がある。14 世紀以降の所産と考えられる。22～24 は平安時代の混入品である。22 は緑釉陶器の小碗である。口径 10.1 cm、底径 5.2 cm、器高 3.4 cm を測る。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁端部は外反する。平高台で、底面には回転糸切痕が認められる。硬質で、深緑色の釉薬が全面に施されている。石作 1・2 号窯段階のもので、9 世紀半ばに比定される。23 は須恵器の壺の底部である。高台径 10.7 cm。篠窯産か。24 は平瓦である。残存長 18.1 cm、残存幅 15.2 cm。凸面には縄叩き痕、凹面には布目圧痕が認められる。

溝004



溝006



土坑009

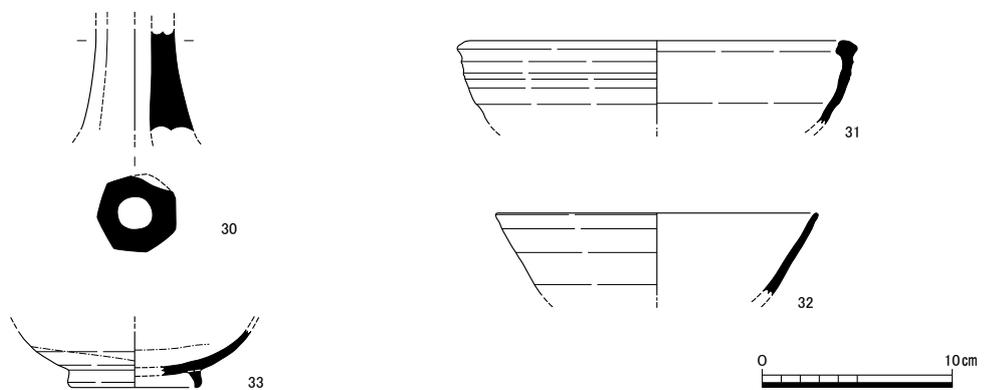


图 15 出土遺物 2 (1 : 4)

#### 溝 006 (図 15、図版 7-2)

25 は瓦質土器の羽釜である。口径 22.0 cm。薄手のつくりで、体部が直線的に立ち上がり、口縁端部は平たく仕上げられる。口縁部付近には短い鏝が貼り付けられる。体部外面にはオサエのちハケ、内面はオサエのちナデ調整が施されている。外面に煤の付着が認められる。14 世紀の所産と考えられる。26～29 は平安時代の混入品である。26 は土師器の皿 A である。小片のため口径を復元できなかったが、小型品と見られる。体部中央に稜を持ち、口縁端部はわずかに上方へ突出する。3 A 段階に属し、10 世紀前半に比定される。27・28 は須恵器である。27 は鉢である。口径 20.2 cm を測る。体部は外方に立ち上がり、口縁部にて上方へ短く屈曲し、口縁端部は玉縁状に肥厚する。体部から口縁部にかけて水挽成形されている。篠窯産で、10 世紀末の所産と見られる。28 は平瓶の口頸部である。口径 10.0 cm。口頸部は外方へ直線的に立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。29 は緑釉陶器の皿である。口径 14.9 cm を測る。体部はやや直線的に外に開いて浅く立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。内外面ともヘラ磨き調整によって仕上げられ、全面に深緑色の施釉が施されている。焼成は軟質で、厚手のつくりになっている。黒笹 14 号窯段階のもので、9 世紀前半に比定される。

#### 土坑 009 (図 15、図版 7-3)

当遺構から出土した鎌倉時代から室町時代の遺物は細片が多く、図示できなかった。ここでは平安時代の混入品のみ掲載する。30 は土師器の高坏脚部である。ヘラ削りによって 7 面の面取りが行われている。31 は須恵器の鉢である。口径 19.4 cm を測る。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は玉縁状に肥厚する。体部から口縁部にかけて水挽成形されている。篠窯産で、11 世紀初頭のものと考えられる。32 は緑釉陶器の椀である。口径 16.9 cm。体部から口縁部にかけて外方へ直線的に立ち上がり、やや薄手で、焼成は軟質である。淡緑色の釉薬が全面に施されている。栗栖野 13・20 号窯段階のもので、9 世紀初頭に比定される。33 は灰釉陶器の椀である。高台径 6.4 cm で、三日月高台を有する。器壁は薄く、体部は丸みを持って立ち上がる。内外面にハケによる施釉が施されている。黒笹 90 号窯段階のもので、9 世紀後半に属すると考えられる。

## 第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では、平安時代前・中期の遺構は認められなかったが、鎌倉時代から室町時代の道祖大路に関連する遺構と、豊臣秀吉が築造した御土居の濠が検出された。以下、これまでの記述と重複するところもあるが、これらの調査成果をまとめ、周辺の調査成果も併せながら考察を述べてゆきたい。なお、本文中で述べる調査地を示す調査番号は図6・表1に対応する。

### 1 検出遺構について（図16・17）

本調査では、平安時代前・中期に帰属する遺構は確認されなかった。しかし、今回検出した遺構の埋土中からは当該期に属する緑釉陶器・灰釉陶器といった国産の高級陶器や輸入磁器などが混入しており、当地周辺において貴族・官吏の邸宅地として繁栄していた様子の一端が見て取れる。

鎌倉時代から室町時代の道祖大路に関連する遺構としては、道祖大路の東側に開削された人工河川（道祖大路川）と推定される流路001と、道祖大路西側溝と推定される溝004を検出している。

流路001は川底部分のみの検出となり、検出幅は約5mを測る。埋土は大礫を多く含んだ砂礫層で、相当な水量や勢いの水流によって短期間のうちに埋没したと考えられる。当地より約50m南の地点で行われたJR山陰本線部分の調査（47-7）<sup>(4)</sup>において、幅約13m以上の道祖大路川と推定される流路が認められている。流路003が流路001から西側に越水した水流の痕跡であったように、道祖大路川は度重なる河川堤防の決壊によって川肩が西側に侵食し、開削当初よりも川幅が大幅に広がったと考えられる。道祖大路川の存続時期は、調査地より南側に位置する右京三条二坊十四町<sup>(9)</sup>、四条二坊十六町<sup>(10)</sup>、四条三坊三町<sup>(11)</sup>の調査によって10世紀から12世紀の間と想定されていた。だが、今回の調査にて14世紀の遺物が出土したことから、当地周辺の道祖大路川はその時期まで機能していたと考えられる。

また、道祖大路に関する遺構の他に、耕作関連の遺構と想定される溝004・006も検出された。溝004は北から南にかけて幅・深さとも急激に広がっており、埋土も大礫を多く含んだ砂礫層であることから、流路001と同じく急激な水量と勢いの水流で基盤層を削られたことにより、このような形状になったものと考えられる。埋没時期は14世紀後半頃であり、流路001とほぼ同時期である。47-7の調査では、今回検出された溝と同一とみられる溝が見つまっている。当該調査では道祖大路西側溝と推定されていたが、本来の推定位置より約3m東に寄っており、溝の軸が当地周辺にて検出されている中世耕作溝の軸と同一であることから、耕作溝の可能性が高い。当地周辺の耕作溝の軸は正方位から西に振れているものが多く見受けられるが、軸が正方位であると西側が氾濫しやすいことから、水の進みやすい方向に沿ってつくられた、自然地形を反映したものと想定される。

平安時代前・中期において当地周辺は邸宅地として盛んに利用されていたが、後期以降は耕作地としての土地利用に転換されてゆくことが周辺の既往調査によって判明している。道祖大路が

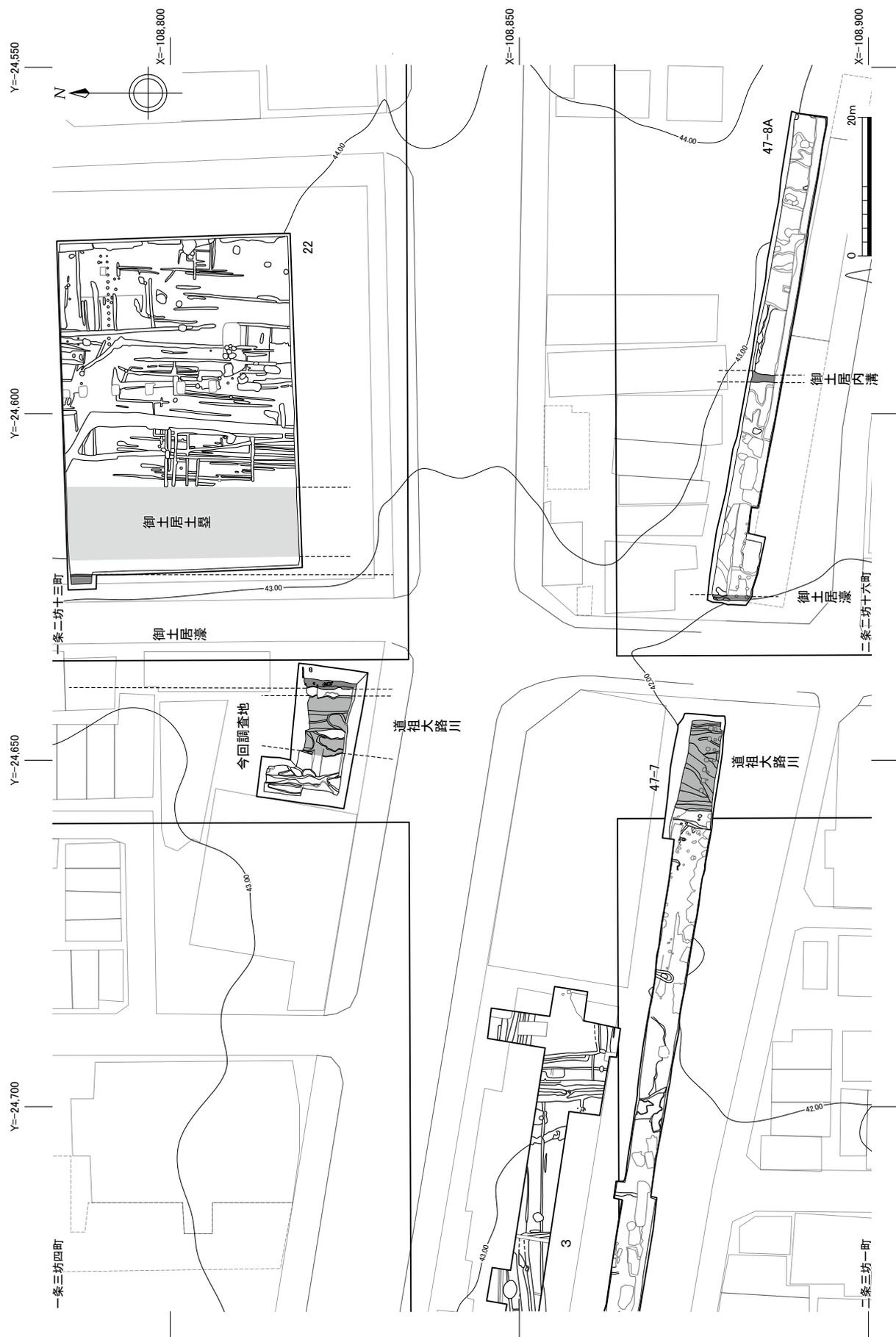


図16 調査地周辺遺構配置図(1:800)

※等高線、道路・建造物境界線は基盤地図情報(国土地理院)を加工して作成した。

延喜式

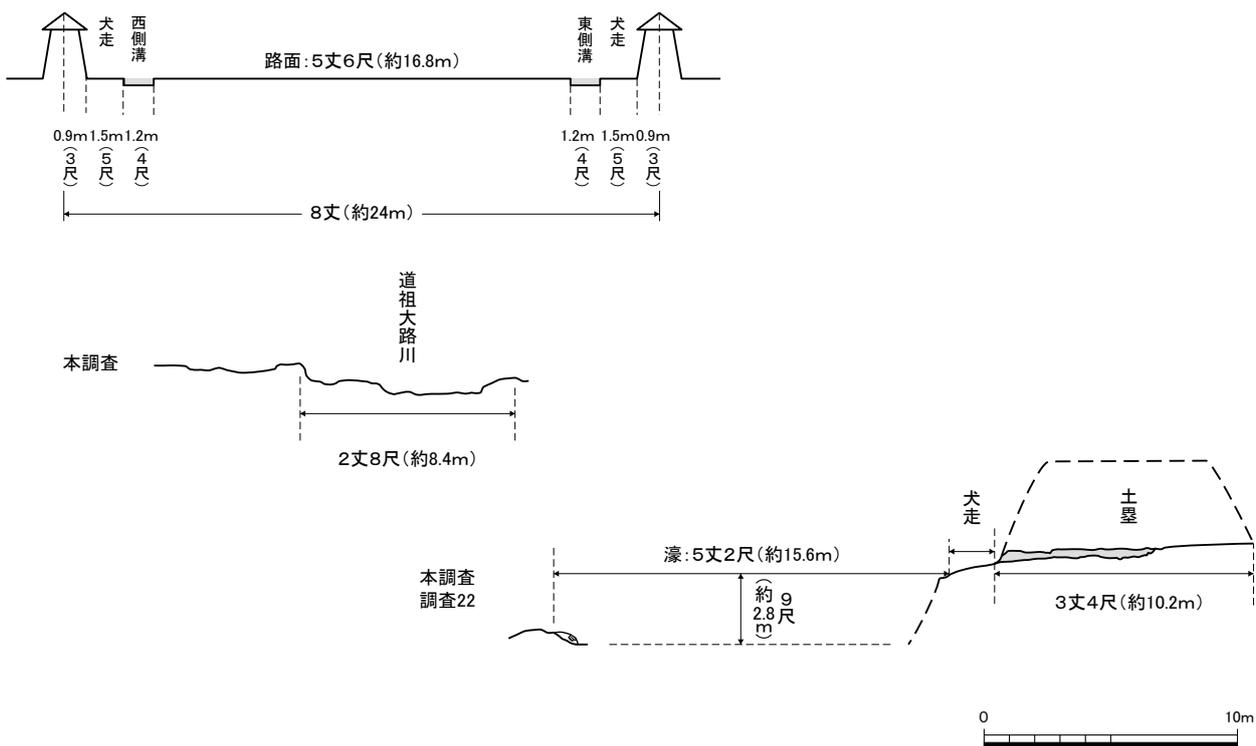


図17 道祖大路・御土居断面模式図（1：300）

※御土居断面模式図の調査22の部分は「平安京右京一条二坊」調査区北壁断面図（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所所蔵）を一部トレース・加筆した。

鎌倉時代から室町時代においても道路としての機能を保持していたかは不明であるが、今回検出された人工河川は既に当地周辺が耕作地化していった中で、用水路としての機能を有していた可能性も考えられる。

御土居の濠と推定される濠002はその西肩部分のみ検出し、江戸時代初頭に行われた石列による護岸工事の痕跡が確認された。調査地東側に隣接する右京一条二坊十三町にて行われた調査(22)<sup>(1)</sup>では御土居の土壘基底部分が検出されており、その基底部より約2m西側の地点にて濠の東肩と想定される落込みが認められている。落込みの東肩から濠002の西肩の距離は約15.6m、落込みの上端から濠002の底面まで約2.8mを測る。また、濠002の石列が道祖大路東側溝西肩推定位置に据えられており、御土居濠が開削された時期においても平安京の条坊は意識されていた可能性が想定される。濠に護岸施設が設けられた事例は今回が初例であるが、江戸時代初頭になると御土居築造当初の外敵の来襲に備えるための環濠としての機能が失われ、上流の紙屋川から分流された用水路としての機能が強化されたことに由来すると考えられる。石列設置後の埋土は大礫混じり砂利層であることから、護岸施設が設置された後程なくして、大雨による河川の氾濫によって短期間のうちに埋没し、その後は放棄されたと想定される。濠002の最終的な埋没時期は江戸時代初頭であるが、御土居の濠は各事例ともに17世紀前半より埋まり始めており、この時期から濠の管理が行われなくなることが判明している。元禄十五（1702）年に作成された『京都

惣曲輪御土居絵図』にて、当地周辺は濠の外郭線は描かれているものの水が溜まっているような表記はなされていないことから、18世紀初頭には既に埋没していたことが窺え、今回の調査結果と相違ない（図18）。調査地周辺（47-8A）<sup>(4)</sup>にて検出されている御土居土塁の内溝も江戸時代前期には埋没しており、以後近代に至るまで耕作地として土地利用が継続している。当地は昭和期の宅地造成土によって基盤層に到達するまで攪乱されていた為確認出来なかったが、近代以降の古地図によると当地は水田として活用されており、周辺一帯と同様、濠の埋没後は耕作地として利用されていたと考えられる。



図18 『京都惣曲輪御土居絵図』（京都大学総合博物館所蔵）と今回の調査地（1：1,500）

以上、当地において検出された遺構の埋没は総じて河川の氾濫に起因しており、当地は水害に対して自然条件的な脆弱性があったことが想定される。

## 2 右京の人工河川及び御土居濠と地形環境について（図 19）

調査地の北西から南東に向かって低くなる現在の微地形は豊臣期に築造された御土居濠の影響によるもので、御土居濠の推定位置と重複する現佐井通は周囲の宅地部分と比べて標高が若干低くなっており、濠は肩部まで全面的に埋められず、現在のような高低差を呈していると推測される。紙屋川扇状地と右京の人工河川の関連性を検討するために作成した等高線図が図 19 である。調査地が立地する紙屋川扇状地は、紙屋川の源流である鷹ヶ峯を起点として多数の小谷筋状の地形が放射状に広がっている。この小谷筋は旧河道の痕跡であり、紙屋川扇状地が形成される過程において、本流である紙屋川から数多に分岐した支流が扇面上を乱流し、紙屋川も頻繁に位置を変え、洪水が扇面上に満遍なく行き渡り、砂礫が堆積して形成されたことを示している。平安時代以前の紙屋川扇状地に由来する自然地形は調査地の北東から南西に向かって緩やかに傾斜するもので、この高低差によって道祖大路川は西側が氾濫していたと考えられる。当地で検出された中世耕作溝の軸が正方位から西に振れているのも、この自然地形に起因するものだろう。平安時代の紙屋川は平安京の条坊に沿って西堀川として付け替えられたものだが、平安時代以前の紙屋川は一条大路以南より南西に進み、調査地の東側を横切って西院の方向に向かっていたと推測される。今回検出した基盤層 1 層（黄褐色砂礫層）は、この平安時代以前の紙屋川推定流路の氾濫堆積と想定される。完新世に形成された紙屋川扇状地帯の堆積物は、始良 T n 火山灰層が分布する更新世段丘面（段丘面 II）の堆積層より上位に分布していることが各事例によって判明しており、調査地周辺においても始良 T n 火山灰層の分布が確認されている（30・35・36）。本調査にて検出された基盤層 2 層に包含されていた花粉及び自然木が旧石器期に属していたことから、基盤層 2 層は紙屋川扇状地帯形成前の更新世段丘面の堆積層に該当すると考えられる。

また、紙屋川扇状地より北西側には大阪層郡段丘面（段丘面 I）を開析するように流れていた旧河道が存在していたことが等高線図から読み取れる。この旧河道は道祖大路の北側延長部から南下し、一条大路北側にて西に蛇行し、調査地の南西側にて平安時代以前の紙屋川と合流する。地図の範囲外になるが、調査地の真北には鹿苑寺（金閣寺）が所在しており、境内の北側には谷筋の出口に土手を設けてつくられた「安民沢」と呼ばれる池が存在する。この園池は鹿苑寺の主池である鏡湖池に水を送る水源にもなっており、この谷筋状の地形には水脈が存在することが窺える。この旧河道が通る流域は、現在の京都市水害ハザードマップ<sup>(12)</sup>にて特に水に浸かりやすいエリアとして周知されており、扇状地河川の本流が扇頂で氾濫を起こしたとき、この旧河道は洪水の水みちとなり、洪水流の主流は小谷筋の地形を一気に流下する。今回の調査で認められた遺構の埋没が総じて河川の氾濫堆積に起因しているのは、この自然地形に由来するものと想定される。右京の紙屋川扇状地帯上には、紙屋川の水を引き込む為に掘削された西堀川の他に、西大宮大路川、野寺小路川、道祖大路川といった人工河川が設けられている（表 4）。10 世紀後半になっ

表4 右京一条～四条人工河川一覧表

名称	調査地点	存続時期	備考	文献
西堀川	二条二坊十一町	8世紀末～9世紀半ば	平安時代中期～室町時代の西堀川(紙屋川)の氾濫堆積、御土居濠を検出。	5
	三条二坊十町	9世紀～10世紀後半	-	6
	四条二坊十一町	9世紀～10世紀初頭	-	7
道祖大路川	一条三坊四町	10～14世紀	本調査	-
	二条三坊一町	10世紀以降	47-7	4
	三条二坊十四町	10世紀～12世紀	-	9
	四条二坊十六町	10世紀～12世紀	-	10
	四条三坊三町	10世紀～12世紀	-	11
西大宮大路川	二条二坊二町	～13世紀	-	3
野寺小路川	三条二坊十四町	12～14世紀	-	8

て西堀川が埋没した前後においても人工河川が継続的に掘削されるのは、洪水の水みちとなっていた旧河道が網状的に縦断する右京域において、雨水管理の役割が大きかったとみられる。

平安時代後期以降における右京衰退の要因として、度重なる水害発生との関連で説明されることが多い。京都盆地の扇状地帯について、鴨川、桂川、御室川において段丘崖の存在が認められるが、紙屋川では平安京域にて形成されず、平安京の北辺より上流部において発達している。これによって、平安京の紙屋川流域は広範囲において氾濫原が分布する地形となり、右京域の大部分が水害の影響を受けやすくなっている。また、平安時代前・中期において、平安京内では洪水の発生頻度が多かったことが判明している。『日本の気象史料』<sup>(13)</sup>では、平安京遷都以前の延暦十一(792)年から江戸時代初頭の慶長二十(1615)年までの洪水記録が詳細に列記されており、9世紀初頭から11世紀前半及び15世紀以降は洪水の発生する回数が多かったが、11世紀後半から14世紀後半までの間は洪水の回数が少なくなっている。洪水の頻度が減少する時期と、道祖大路川及びその他の人工河川の存続時期と重複することからも、その間は右京域においても人工河川の維持管理が可能だったことが窺える。15世紀以降は洪水の頻度の増加に伴い、平安京の条坊に則った人工河川は雨水管理が出来ず放棄され、旧紙屋川が新たに掘削される。旧紙屋川は西ノ京円町以南より平安京の条坊に沿っておらず、右京の人工河川の氾濫によって土砂が厚く堆積し氾濫原から自然堤防と化していたエリアを南西方向に走っている。旧紙屋川は土砂の堆積の活発化によって河床が上昇し、氾濫防止の為に堤防の上積みが繰り返され、天井川化した。それに伴って自然堤防より低い土地では排水不良を引き起こすようになり、後背湿地的な環境が拡大してゆく。

御土居の造営が始まるのは天正十九(1591)年以降である。御土居の西境は一条大路以北まで旧紙屋川を濠としてその内側に土塁が築造されるが、一条大路以南より旧紙屋川が土塁を分断して洛内を通過し、西堀川小路と春日小路の交差点で土塁の外側へ南西方向に流れてゆく。土塁は一条大路以南から南西方向に膨らみ、鷹司小路と春日小路の間にて道祖大路まで西側に凸状に突

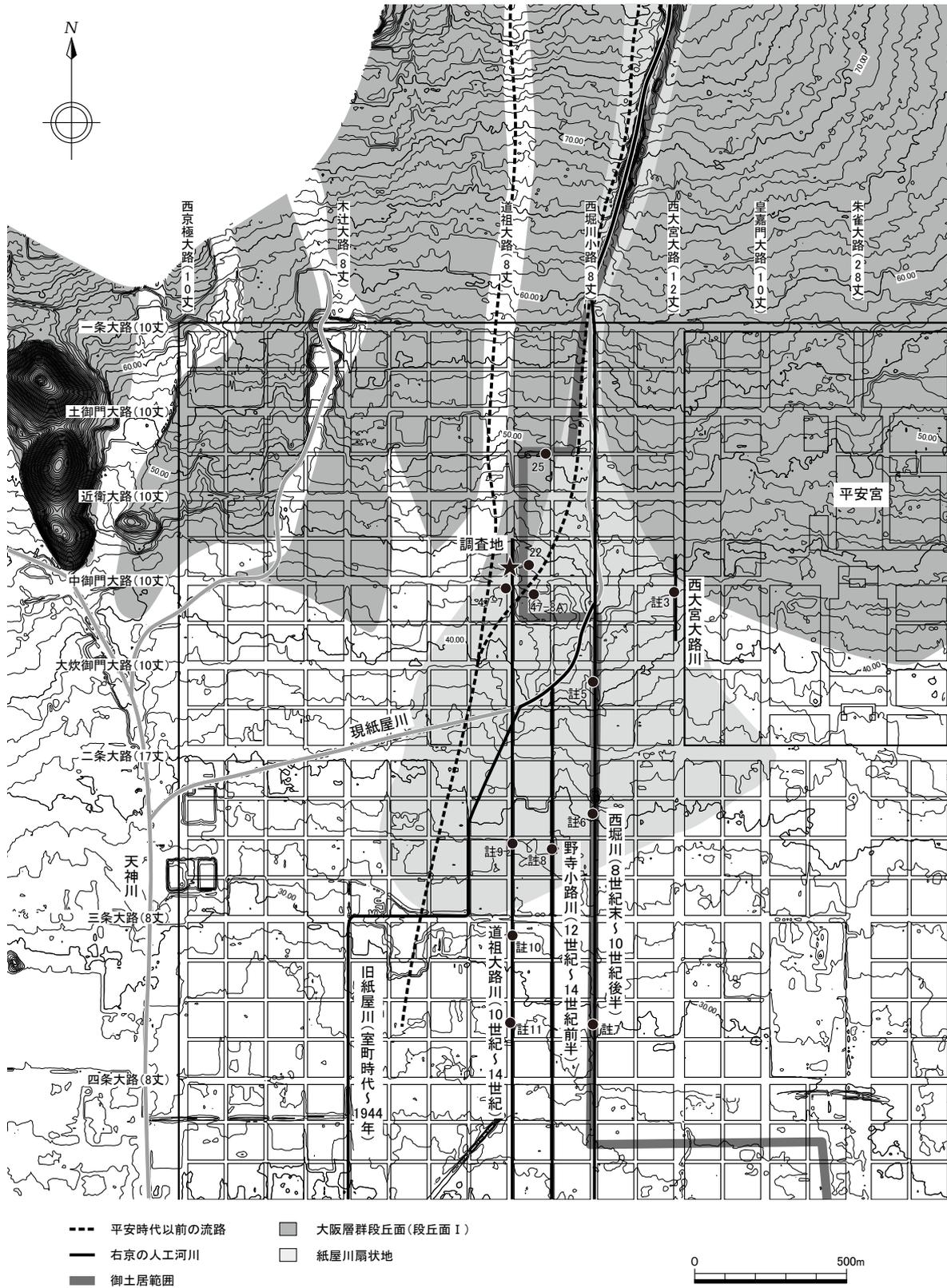


図19 右京河川変遷図 (1 : 20,000)

※等高線は基盤地図情報(国土地理院)を加工して作成。

出し、春日小路以南より西堀川小路に沿って南下する。一条大路以南より濠は土塁に沿って新たに開削されており、右京一条二坊十五町の調査(25)<sup>(2)</sup>や二条二坊十一町の調査<sup>(5)</sup>、今回の調査においても御土居濠が検出されている。この「御土居の袖」と呼ばれる部分について、図19をもとに地形環境から検討を行ったところ、御土居の袖に相当するエリアは紙屋川扇状地が段丘崖から氾濫原へと切り替わる部分であり、水に浸かりやすい地形であることが読みとれる。47-8Aの調査において、御土居土塁の内溝がつくられたものの水が排水されず溢れていた痕跡が確認されている。25の調査地点においても、昭和期の古写真を見ると御土居濠部分が沼地化しており、御土居の袖部分が排水不良を起こしやすい土地であったことが窺える。また、一条大路以南より南西方向に向かう土塁及び濠は平安時代以前の紙屋川推定流路に沿っていることが読み取れる。平安時代以前の紙屋川は鷹司小路以南より調査地東側を横切って南西方向に走り、御土居の袖の南西隅へと向かう。旧河道が洪水の水みちであることを踏まえると、旧紙屋川の上流部で洪水が発生した場合、御土居の袖部分に氾濫した水が流れてゆくようになる。このように、御土居の袖は遊水池としての役割を担っていた可能性も考えられる。そして、一条大路以南より御土居の濠は新たに開削される。旧紙屋川と河道を分流させることにより、洛中における旧紙屋川の水量を調節することで洪水対策を行っていた可能性も想定される。御土居の袖の東側には豊臣秀吉が平安宮跡地に造営した聚楽第が所在している。旧紙屋川が氾濫し、聚楽第及びその周囲の屋敷地に水害が及ぶのを防ぐため、旧紙屋川の河道を分散し、御土居の袖を遊水池にすることでその被害を軽減する目的があったのかもしれない。

以上、今回の調査では、平安時代前・中期の良好な資料は発見できなかったが、中近世において平安京内の治水を巡る当地の土地利用の在り方を解明する上での手がかりとなる資料を得ることができた。今後の調査によって、更なる歴史的解明の発展が期待される。

#### 註

- (1) 小森俊寛・南出俊彦「平安京右京一条二坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- (2) 菅田 薫「平安京右京一条二坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- (3) 家崎孝治「右京二条二坊(HR81)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983年
- (4) 小檜山一良・小松武彦・平田 泰・長戸満男「平安宮左馬寮-朝堂院跡・平安京右京一・二条二~四坊」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- (5) 高橋 潔・モンベティ恭代『平安京右京二条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-25 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2014年
- (6) 平尾政幸・辻 純一「右京三条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1984年

- (7) 布川豊治『平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2015-1 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2015 年
- (8) 布川豊治『平安京右京三条二坊十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006 年
- (9) 南 孝雄「平安京右京三条二坊」『平成 10 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000 年
- (10) 辻 裕司「平安京右京四条二坊」『昭和 63 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993 年
- (11) 李 銀眞・松平修平『平安京右京四条三坊三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2021-10 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2022 年
- (12) 京都市行財政局防災危機管理室『水害ハザードマップ（上京区・中京区）』（令和 3 年 5 月）
- (13) 中央气象台・海洋气象台『日本の気象史料』原書房 1976 年

#### 参考文献

- 卯田 強「GIS で見た平安京の原地形」『新潟大学災害復興科学センター年報』第 1 号 2007 年
- 河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化 ―遺跡に記録された災害情報を用いた水害史の再構築―」『京都歴史災害研究』第 1 号 2004 年
- 中村武生『御土居堀ものがたり』京都新聞出版センター 2005 年
- 中村武生「豊臣期京都惣構の復元的考察 ―「土居堀」・虎口・都市民―」『日本史研究』四二〇号 1997 年
- 南 孝雄「御土居の実像 ―近年の発掘調査成果から―」第 257 回京都市考古資料館文化財講座 2014 年
- 南 孝雄『平安京右京三条三坊三町跡・西ノ京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-23 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2013 年

表5 遺物観察表

掲載 No	器種	器形	地区	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	備考
1	土師器	皿	E・F-4・5	流路001 下層	6.2	1.4	-	7.5YR7/6 橙色	皿N
2	須恵器	鉢	E・F-4・5	流路001 上層	27.9	5.9	-	N6/0 灰色	東播系
3	須恵器	鉢	E・F-4・5	流路001 下層	30.0	(5.0)	-	N5/0 灰色	東播系
4	青磁	椀	E・F-4・5	流路001 下層	-	(2.3)	-	(胎) N7/0 灰白色 (釉) 青緑色	南宋・龍泉窯
5	焼締陶器	甕	E-3・4	流路001 西肩部	-	(2.6)	-	2.5Y7/1 灰白色	常滑
6	焼締陶器	捏ね鉢	F-4～6	流路001 東肩部	34.4	(5.7)	-	5YR6/4 にぶい橙色	信楽
7	瓦質土器	羽釜	E-3・4	流路001 西肩部	18.2	(7.5)	-	N5/0 灰色	
8	瓦質土器	羽釜	E-3・4	流路001 西肩部	23.0	(4.7)	-	7.5YR7/3 にぶい橙色	土師質
9	瓦	丸瓦	F-4～6	流路001 東肩部	長 (13.5)	幅 (12.2)	厚 3.1	N5/0 灰色	吊り紐痕
10	須恵器	小壺	E・F-6	流路001	-	(3.5)	3.4	N6/0 灰色	
11	青磁	椀	E-3・4	流路001 西肩部	-	2.2	10.0	(胎) 10YR7/2 にぶい黄橙色 (釉) 5Y7/3 浅黄色	長沙窯
12	青磁	皿	G-4・5	溝002 裏込土	-	(2.7)	6.0	(胎) N8/0 灰白色 (釉) 2.5GY7/1 明緑灰色	古伊万里
13	白磁	器種不明	F・G-4・5	溝002 埋土	体部径 8.0	(10.9)	-	(胎) N8/0 灰白色 (釉) N8/0 灰白色	古伊万里
14	青磁	椀	G-4・5	溝002 埋土	-	(2.8)	-	(胎) 7.5Y8/1 灰白色 (釉) 10Y6/2 オリーブ灰色	明・龍泉窯
15	焼締陶器	擂鉢	F・G-4～6	溝002 埋土(最下層)	-	(3.6)	-	10YR6/2 灰黄褐色	信楽
16	土師器	皿	C・D-4	流路003	-	(1.7)	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	皿N
17	須恵器	鉢	C・D-5	流路003	-	(3.9)	-	N4/0 灰色	東播系
18	青磁	椀	C・D-5	流路003	11.2	(2.9)	-	(胎) N8/0 灰白色 (釉) 2.5GY7/1 明緑灰色	南宋・龍泉窯
19	灰釉陶器	椀	C・D-3・4	流路003	-	(1.6)	10.2	2.5Y6/1 黄灰色	
20	土師器	皿	B-4・5	溝004	12.7	(3.1)	-	7.5YR8/3 浅黄橙色	皿S
21	焼締陶器	鉢	B・C-2・3	溝004	-	(5.8)	-	2.5YR6/6 橙色	信楽
22	緑釉陶器	小椀	B・C-2・3	溝004	10.1	3.4	5.2	(胎) N7/0 灰白色 (釉) 7.5Y6/2 灰オリーブ色	京都産
23	須恵器	壺	B3	溝004	-	(3.4)	10.7	N6/0 灰色	
24	瓦	平瓦	B-3・4	溝004	長 (18.1)	幅 (15.2)	厚 2.0	N7/0 灰白色	
25	瓦質土器	羽釜	A・B-2・3	溝006	22.0	(6.4)	-	7.5YR7/2 明褐色	
26	土師器	皿	A・B-2・3	溝006	-	(1.7)	-	7.5YR8/2 灰白色	皿A
27	須恵器	鉢	A・B-2・3	溝006	20.2	(4.0)	-	N7/0 灰白色	篠窯産
28	須恵器	平瓶	A・B-2・3	溝006	10.0	(8.0)	-	N7/0 灰白色	篠窯産か
29	緑釉陶器	皿	A・B-2・3	溝006	14.9	(2.0)	-	(胎) 5Y8/1 灰白色 (釉) 2.5GY7/1 明緑灰色	猿投産
30	土師器	高坏	B3	土坑009	-	(5.4)	-	10YR7/2 にぶい黄橙色	
31	須恵器	鉢	B3	土坑009	19.4	(4.4)	-	N7/0 灰白色	篠窯産
32	緑釉陶器	椀	B3	土坑009	16.9	(4.4)	-	(胎) 2.5Y8/2 灰白色 (釉) 7.5Y7/2 灰白色	京都産
33	灰釉陶器	椀	B3	土坑009	-	(3.1)	6.4	(胎) N7/0 灰白色 (釉) 2.5Y8/2 灰白色	

# 附章 平安京右京一条三坊四町跡・ 御土居跡発掘調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡は、京都盆地北西部に立地し、低位段丘上に相当する。今回は検出された木材の種類と年代、流路から採取した土壌の花粉分析を行い、当時の環境に関する情報を得る。

## 1. 試料

流路001からは木材No. 1（杭）と土壌No. 1、濠002からは土壌No. 2を採取した。また、木材No. 2（自然木）と土壌No. 3は地山と想定した層位から採取した。この地山面の堆積時期と古環境推定を目的とする。

## 2. 分析方法

### (1) 放射性炭素年代測定

試料の表面に付着した泥などの不純物を削り落として50mgに調整する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge 3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1 mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}C$ は試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線はIntCal20(Reimer et al.,2020)とBomb21NH2(Hua et. al.,2021)である。

## (2) 樹種同定

生材は、剃刀を用いて木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。ガムクロラールで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

## (3) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本をはじめ、Erdtman（1952,1957）、Faegri&Iversen（1989）などの花粉形態に関する文献や、島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

## 3. 結果

### (1) 放射性炭素年代測定

結果を表1、図1に示す。試料の保存状態は良く定法での分析処理が可能であり、測定に必要なグラフィットは十分得られている。No. 1の値は現代炭素（F14C:  $1.46429 \pm 0.00288$ ）、同位体補正を行ったNo. 2の値は $36100 \pm 200$ BPである。

暦年較正は、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、その後訂正された半減期（14Cの半減期 $5730 \pm 40$ 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20（Reimer et al.,2020）を用いる。一方、現代の核実験の影響から暦年代を求めるにはBomb21 NH2（Hua et al.,2021）を用いる。No. 1は、西暦1972～1973年頃、No. 2は41000年前を示す。

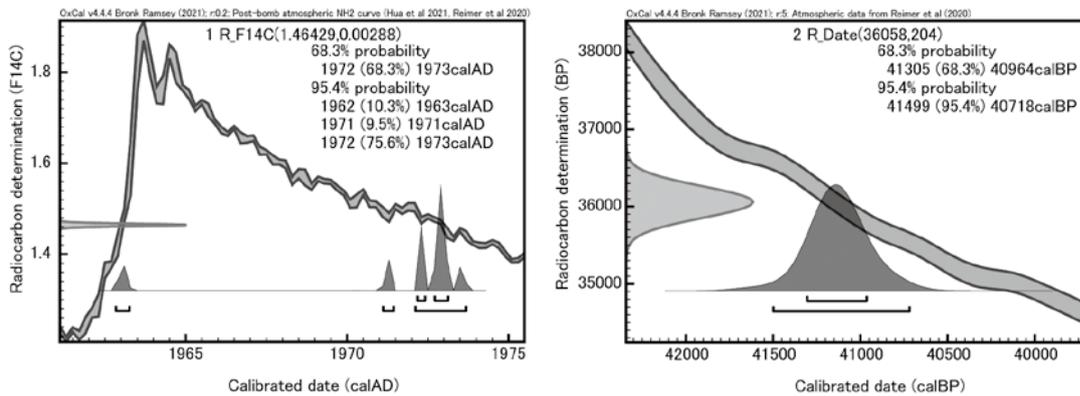


図1. 暦年較正結果

表1. 放射性炭素年代測定・樹種同定結果

No.	性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代			Code No.	
					年代値		確率%		
1	生材 スギ	AAA (1M)	現代 F14C:1.46429 ± 0.00288	-26.95 ± 0.28	$\sigma$	calAD 1972 - 1973	68.3	YU- 16518	pal- 14223
					$2\sigma$	calAD 1962 - 1963	10.3		
						calAD 1971 - 1971	9.5		
						calAD 1972 - 1973	75.6		
2	生材 モクレン属	AAA (1M)	36100 ± 200 (36058 ± 204)	-27.26 ± 0.26	$\sigma$	41305 - 40964 calBP	68.3	YU- 16519	pal- 14224
					$2\sigma$	41499 - 40718 calBP	95.4		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$ (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、OxCal v4.4を使用
- 6) 較正データセットは、① Bomb21(NH<sub>2</sub>)、② IntCal20を使用。
- 7) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$ が68.2%、 $2\sigma$ が95.4%である

## (2) 樹種同定

結果を表1に示す。No. 1はスギ、No. 2はモクレン属であった。以下、植物解剖学的所見を述べる。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2個が多い。放射組織は単列、1～10細胞高。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔～階段状、壁孔は階段状に配列する。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

## (3) 花粉分析

結果を表2、図2に示す。No. 2は、分析残渣が少なく、花粉化石は未検出であるが、No. 1とNo. 3は花粉化石がみられ、検出量が多いが、保存状態やや不良である。

No. 1、No. 3の組成は類似する。双方ともシダ類胞子の割合が高い。花粉化石の中では木本花粉の割合が高く、特にマツ属、モミ属、ツガ属、トウヒ属など針葉樹花粉が多く検出される。広葉樹花粉はハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属がみられる。現在の日本からは消滅したハリゲヤキ属を含む。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、ワレモコウ属、ヨモギ属を含む。No. 1のみ、わずかではあるが栽培種であるイネ属の花粉を含む。

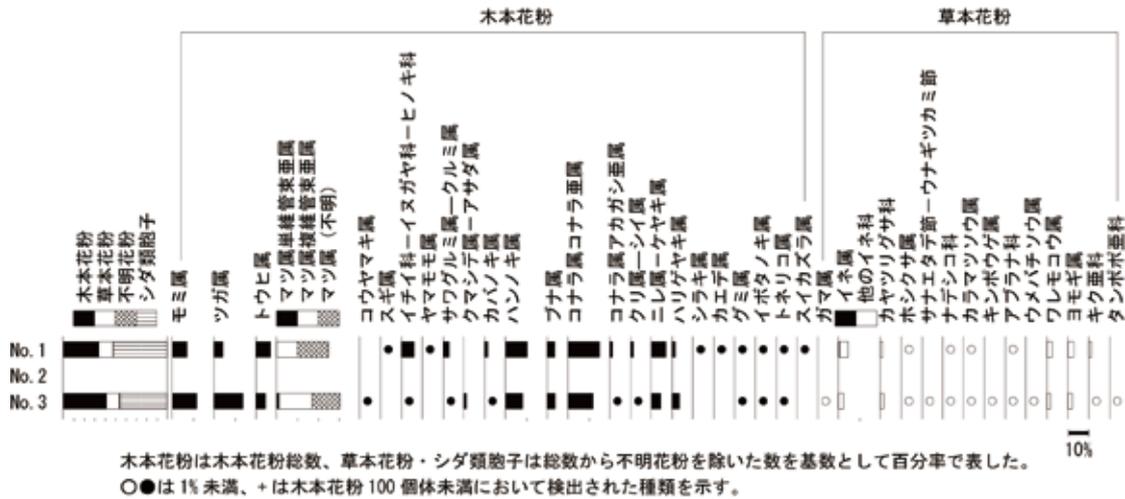


図2. 花粉化石群集の層位分布

#### 4. 考察

木材の年代測定並びに樹種同定の結果、No. 1は、1970年代の樹木の可能性が高く、種類はスギである。スギは比較的軽軟で加工がしやすく、水湿にも強い。さらに太くまっすぐな材が得やすいことから、建築材をはじめ器具材など幅広い用途で使われる良材である。木材の用途（杭）と年代、ほぼ同時期に建物が建築されていることを踏まえると、建築物の基礎杭に由来する可能性が高い。

花粉分析の結果をみると、流路内と地山の組成がほとんど変わらないことから、流路内の堆積物は地山の二次堆積と考えられる。花粉化石群集の特徴として、消滅種のハリゲヤキ属がNo. 1、No. 3双方からみられる。本州各地の花粉分析結果をみると、ハリゲヤキ属は最終氷期のなかでも比較的冷涼であった時期（MIS3）までにみられるが、約2万～2.5万年前の最終氷期最寒冷期（MIS2）に日本から消滅したと考えられる（吉田ほか,2011など）。これは地山から検出された自然木（No. 2）の年代測定結果が約41000年前であったこととも矛盾しない。さらに、大阪平野周辺の最終氷期再寒冷期前の花粉化石群集は（古谷・田井,1993）、モミ属・ツガ属・トウヒ属、マツ属などの針葉樹とハンノキ属、コナラ属など低湿地に多い広葉樹、ワレモコウ属、イネ科、カヤツリグサ科などの草本類から成り立っており、今回の結果と類似する。このことから、地山の年代観は、最終氷期最寒冷期前の比較的冷涼な時期に相当し（MIS3）、山地にはモミ属・ツガ属・トウヒ属、マ

ツ属などの針葉樹が、河川近くの低地には、湿った場所を好むハンノキ属、コナラ属、ニレ属—ケヤキ属など広葉樹が生育していたと思われる。また、ワレモコウ属、イネ科、カヤツリグサ科などが生育する開けた草地も存在していたと思われる。

なお、No. 1には少量ではあるがイネ属花粉がみられる。これは流路が形成された中世の植生を反映していると考えられる。京都盆地では平安時代に入るとイネ属、ソバ属、ベニバナ属などの栽培植物や、イネ科やヨモギ属など含む草本類の増加が確認される。平安時代末以降になると、草本類の割合や栽培種の種類数がさらに増え、開発によって森林が伐採され、開けた場所が増えたことがうかがえる。一方木本類は、平安時代の初期はアカガシ亜属やコナラ亜属といった広葉樹が比較的多く産出し、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属などの針葉樹を伴う組成であったものが、時代を追う毎にマツ属が漸増し、12世紀頃には高率となる。これは周辺の森林伐採が進んで、マツ二次林が増加したことを示している（パリノ・サーヴェイ株式会社,2008など）。今回の花粉分析の結果は、地山からの二次堆積によるものが大部分を占め、流路が形成された当時の環境を反映していなかったが、おそらく、過去の花粉分析結果と概ね類似した古植生であったと考えられる。

表 2. 花粉分析結果

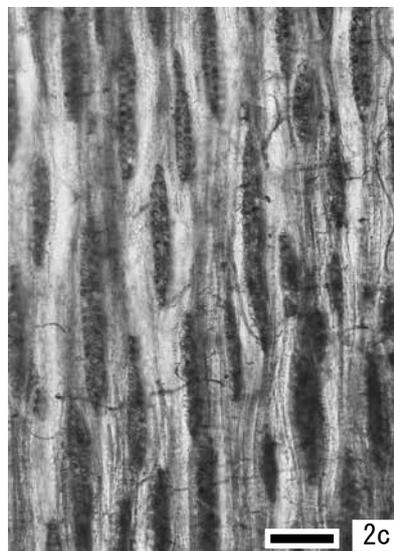
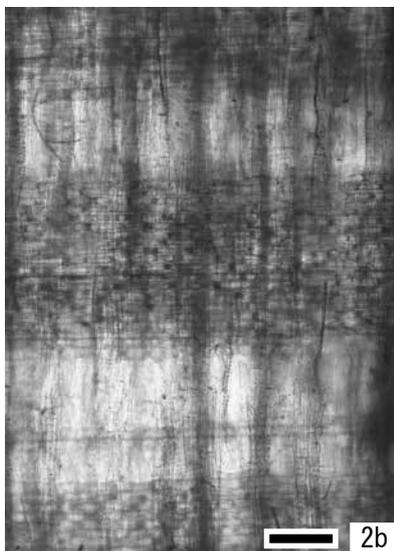
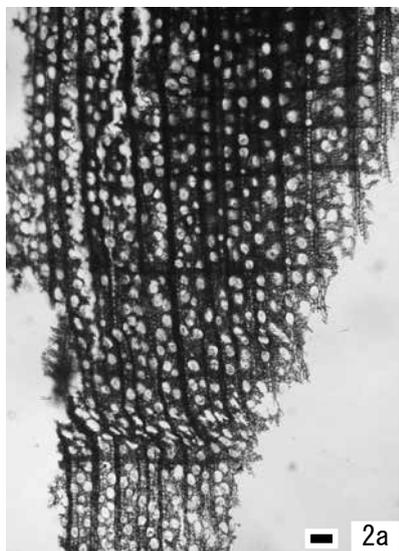
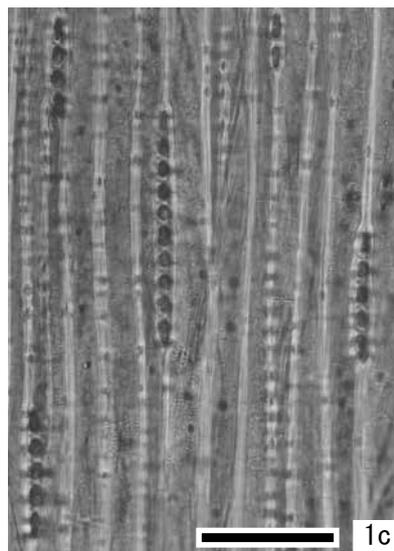
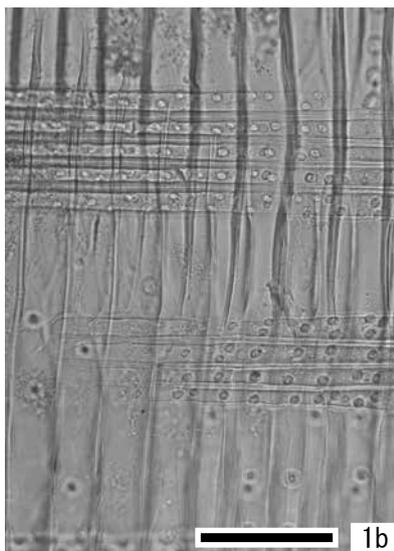
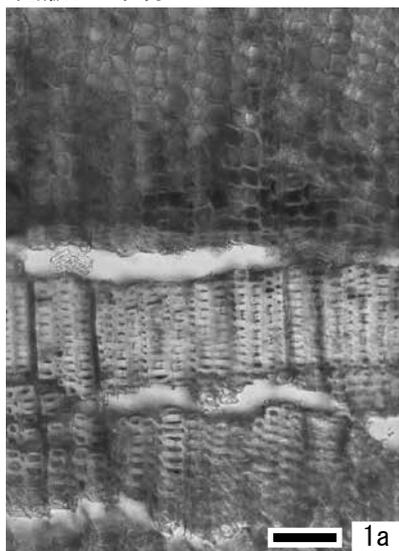
種 類	No.1	No.2	No.3
<b>木本花粉</b>			
モミ属	15	-	30
ツガ属	9	-	36
トウヒ属	15	-	12
マツ属単維管束亜属	-	-	3
マツ属複維管束亜属	21	-	41
マツ属(不明)	32	-	35
コウヤマキ属	-	-	1
スギ属	2	-	-
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	13	-	2
ヤマモモ属	2	-	-
サワグルミ属—クルミ属	6	-	2
クマシデ属—アサダ属	-	-	3
ハシバミ属	-	-	1
カバノキ属	3	-	1
ハンノキ属	22	-	21
ブナ属	8	-	10
コナラ属コナラ亜属	32	-	31
コナラ属アカガシ亜属	3	-	1
クリ属—シイ属	3	-	2
ニレ属—ケヤキ属	15	-	12
ハリゲヤキ属	3	-	9
ウルシ属	-	-	1
シラキ属	1	-	-
カエデ属	1	-	-
グミ属	1	-	1
イボタノキ属	1	-	2
トネリコ属	2	-	1
スイカズラ属	1	-	-
<b>草本花粉</b>			
ガマ属	-	-	1
イネ属	2	-	-
他のイネ科	27	-	15
カヤツリグサ科	8	-	10
ホシクサ属	1	-	1
サナエタデ節—ウナギツカミ節	-	-	2
ナデシコ科	1	-	2
カラマツソウ属	2	-	2
キンボウゲ属	-	-	2
アブラナ科	1	-	1
ウメバチソウ属	-	-	1
ワレモコウ属	16	-	11
バラ科	-	-	1
セリ科	-	-	2
ヨモギ属	18	-	14
キク亜科	9	-	6
タンポポ亜科	-	-	4
<b>不明花粉</b>			
不明花粉	1	-	4
<b>シダ類胞子</b>			
シダ類胞子	321	-	281
<b>合 計</b>			
木本花粉	211	0	258
草本花粉	85	0	75
不明花粉	1	0	4
シダ類胞子	321	0	281
合計(不明を除く)	617	0	614

#### 引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.
- Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I).Almqvist&Wiksell,539p.
- Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II).Almqvist&Wiksell,147p.

- Faegri K. & Iversen J.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.
- 藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.
- 古谷正和・田井昭子,1993,大阪層群と段丘堆積層・沖積層の花化石.大阪層群.市原 実編著,創元社,247-255.
- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- Hua Q., Turnbull J. C., Santos G. M., Rakowski A. Z., Ancapichún S., De Pol-Holz R., Hammer S., Lehman S. J., Levin I., Miller J. B., Palmer, J. G., & Turney C. S. M.,2021, Atmospheric Radiocarbon For The Period 1950–2019. Radiocarbon,63,1–23.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011,日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴ⅠⅡ(図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社,2008,付章 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-7平安京右京六条一坊三町跡,(財)京都市埋蔵文化財研究所.39-62.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33.
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H. G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
- Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花化石形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .
- 吉田明弘・鈴木三男・金 憲爽・大井信三・中島 礼・工藤雄一郎・安藤寿男・西本豊弘,2011,茨城県花室川堆積物の花粉・木材化石からみた最終氷期の環境変遷と絶滅種ヒメハリゲヤキの古生態.植生史研究,20(1),27-40.

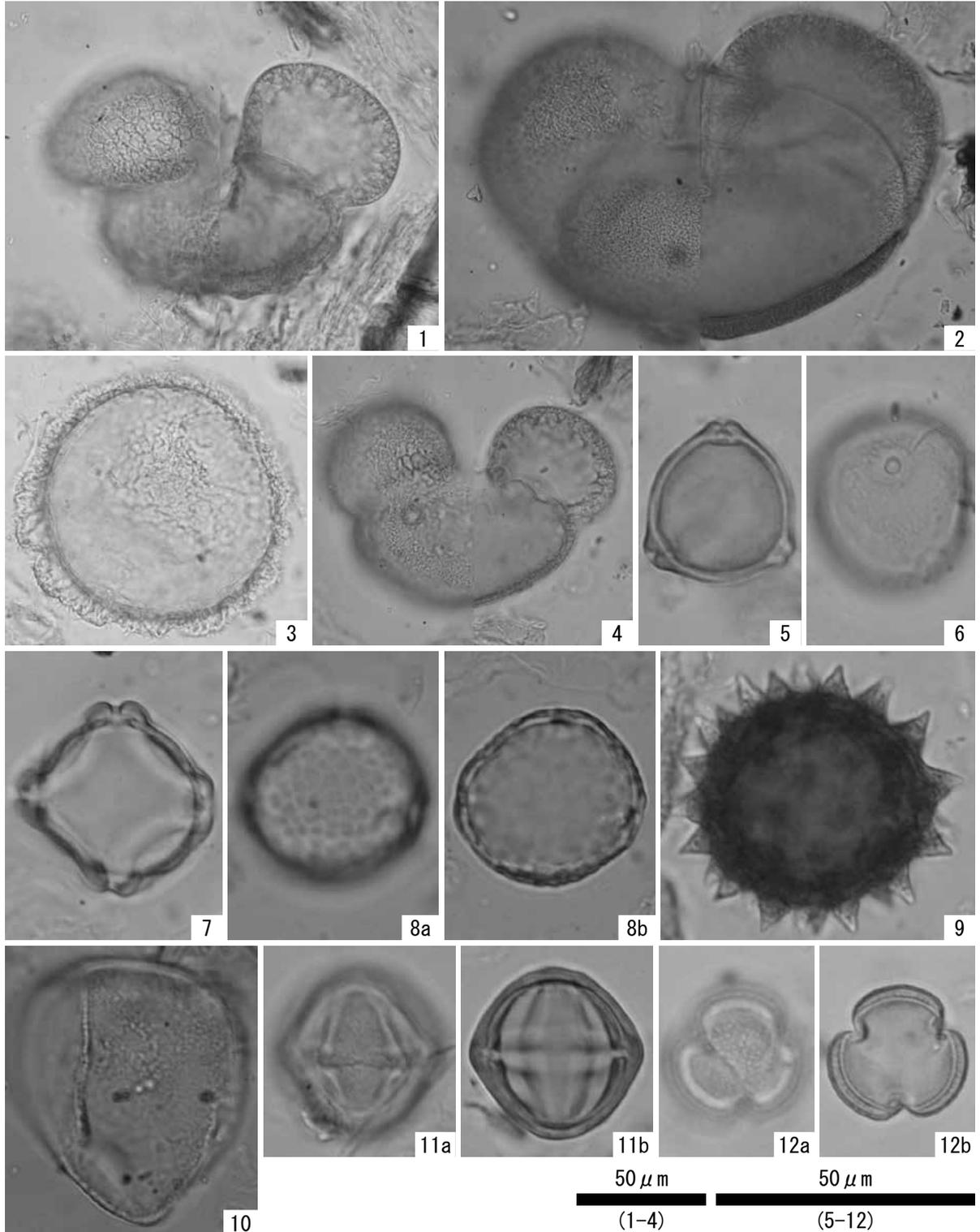
図版1 木材



- 1. スギ (No. 1)
- 2. モクレン属 (No. 2)

a:木口 b:柁目 c:板目  
スケールは100  $\mu$ m

図版2 花粉化石



1. モミ属 (No. 3)
3. ツガ属 (No. 3)
5. カバノキ属 (No. 3)
7. ハンノキ属 (No. 3)
9. キク亜科 (No. 3)
11. ワレモコウ属 (No. 3)

2. トウヒ属 (No. 3)
4. マツ属複維管束亜属 (No. 3)
6. イネ科 (No. 3)
8. ハリゲヤキ属 (No. 3)
10. カヤツリグサ科 (No. 3)
12. ヨモギ属 (No. 3)



# 図 版





1. 遺構検出後 調査区全景（西から）



2. 遺構検出後 調査区全景 垂直写真（上が北）



1. 遺構掘削後 調査区全景（西から）



2. 遺構掘削後 調査区全景 垂直写真（上が北）



1. 流路001 完掘状況（北から）



2. 調査区南壁 流路001部分（北から）



1. 濠002 石列検出状況（北から）



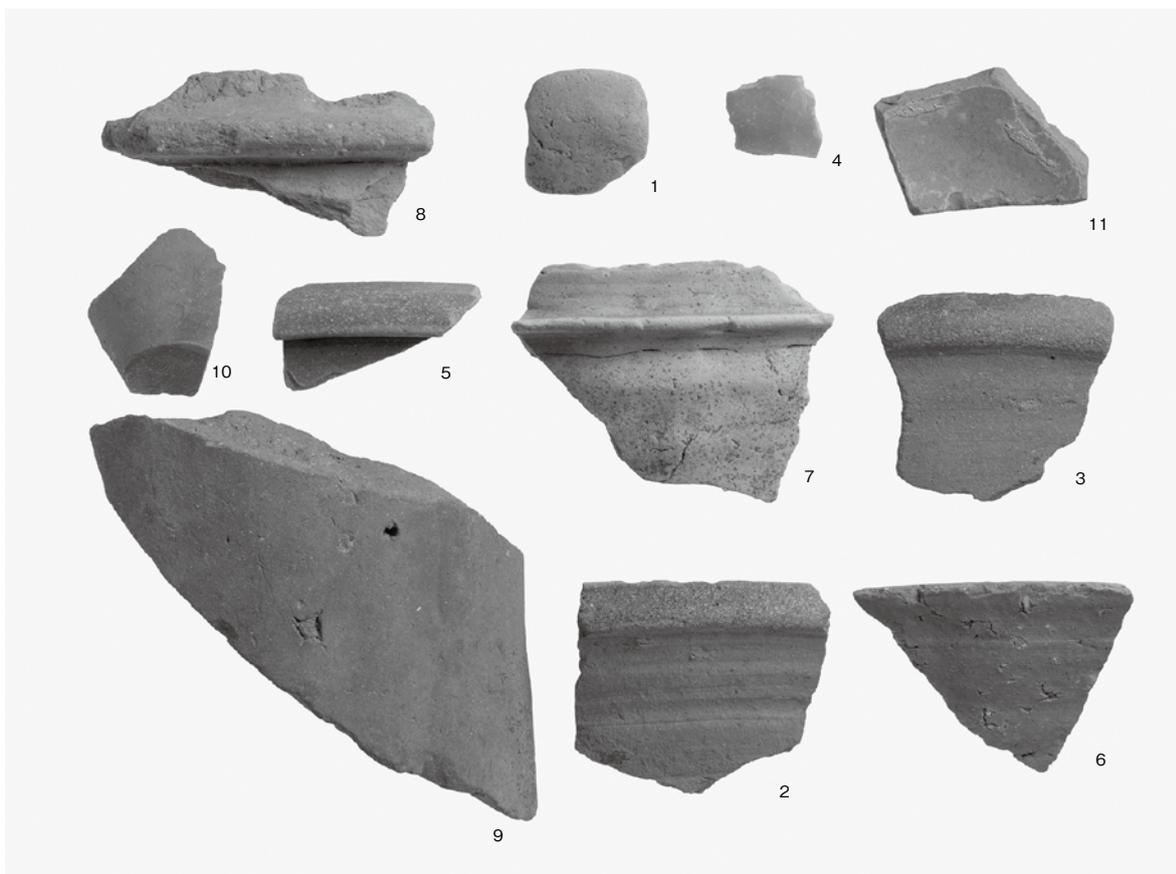
2. 濠002 完掘状況（北から）



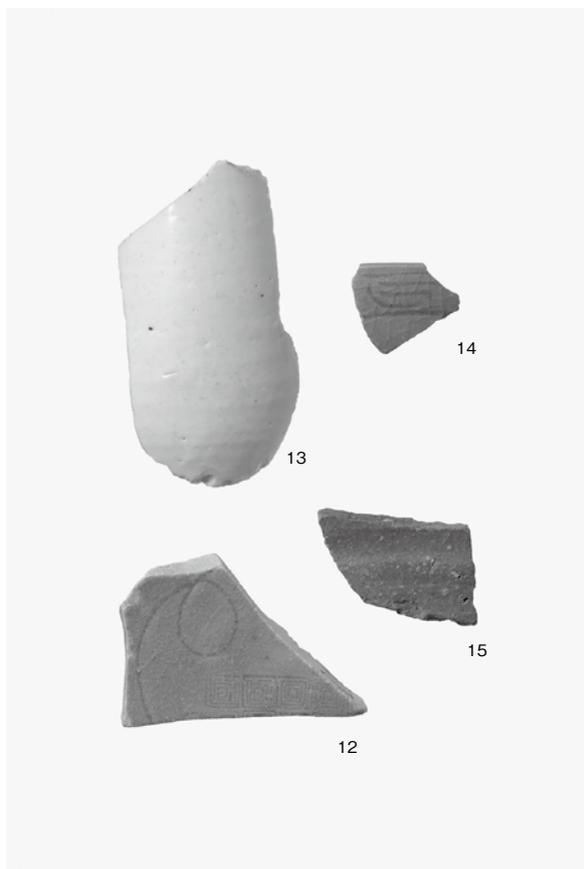
1. 溝004・006、土坑009 完掘状況（北から）



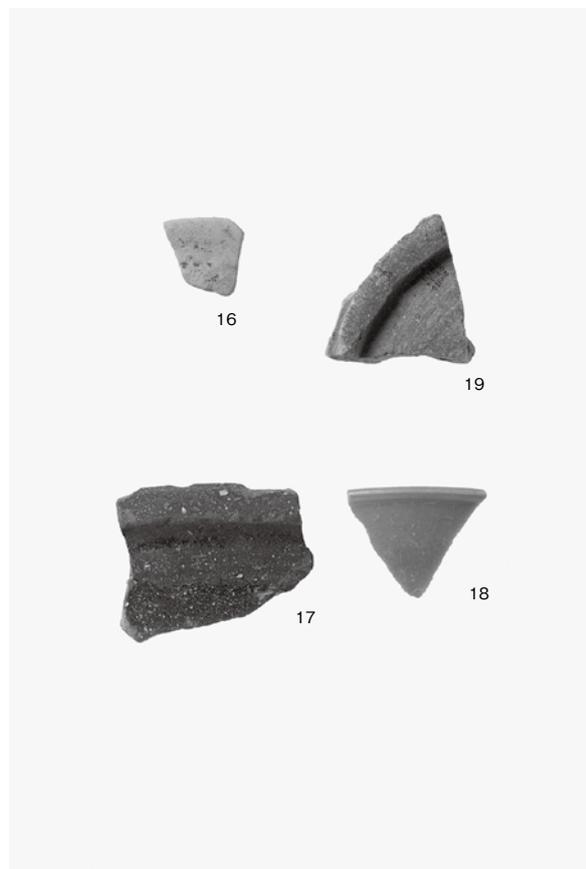
2. 調査地遠景（調査地上空より南方 丸太町通・佐井通を望む）



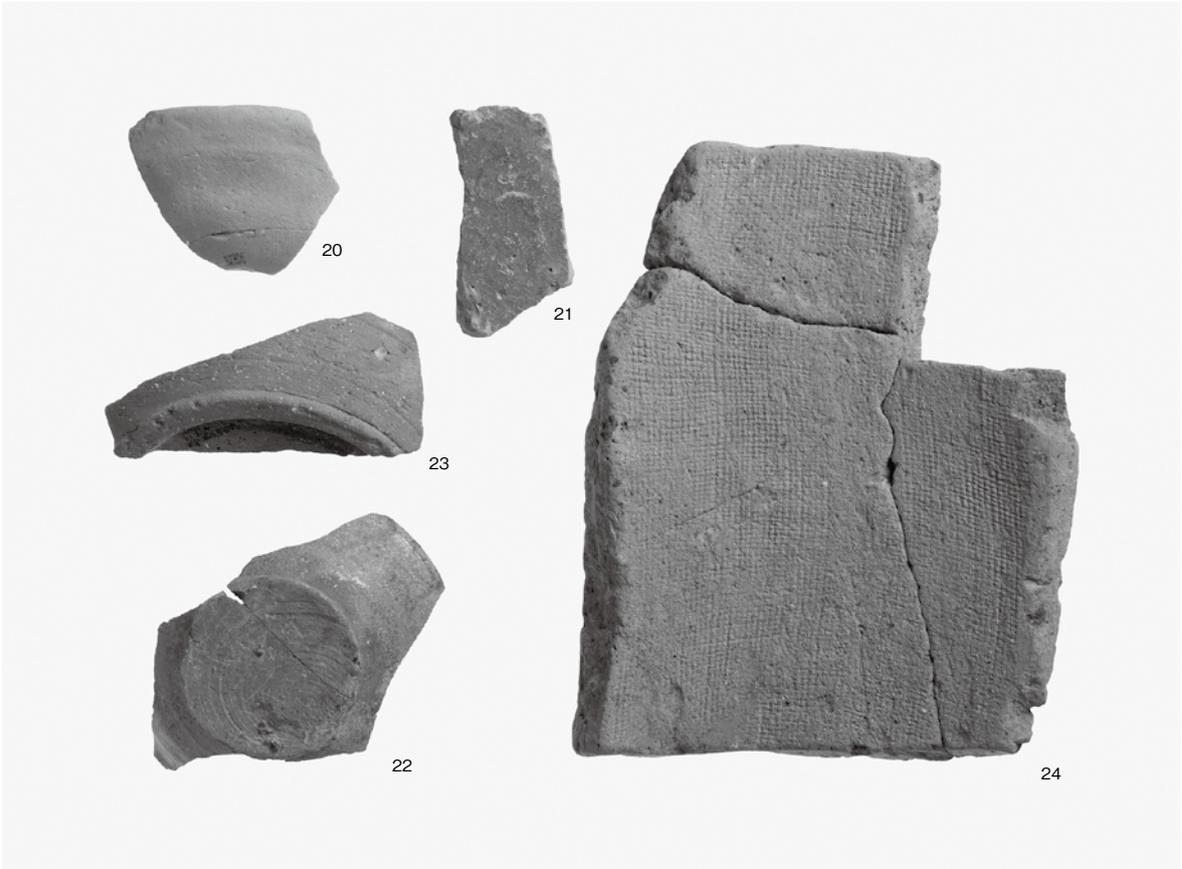
1. 流路001 出土遺物



2. 濠002 出土遺物



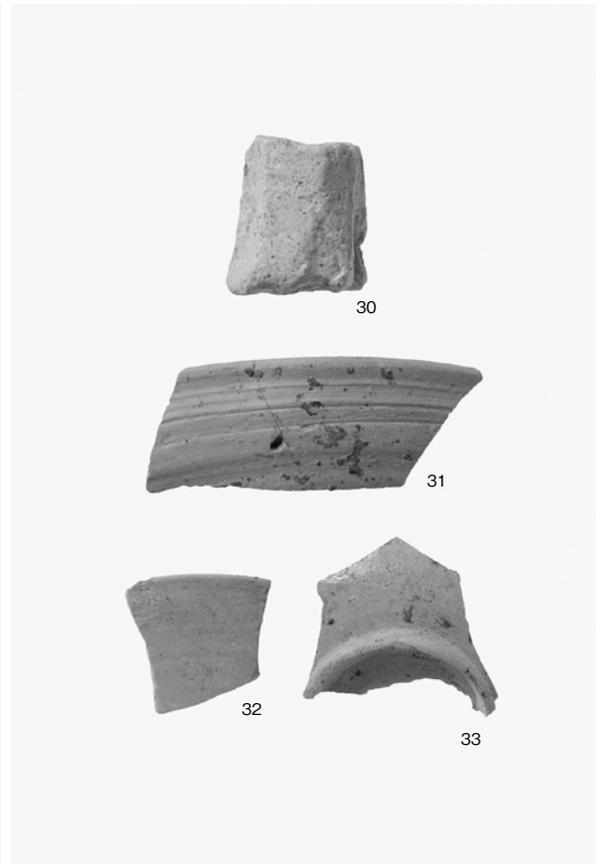
3. 流路003 出土遺物



1. 溝004 出土遺物



2. 溝006 出土遺物



3. 土坑009 出土遺物



## 報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょういちじょうさんぼうよんちょうあと・おどいあとはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡発掘調査報告書							
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	望月麻佑							
編集機関	株式会社 文化財サービス							
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58							
発行所	株式会社 文化財サービス							
発行年月日	2022年11月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょういち 平安京右京一 じょうさんぼうよんちょう 条三坊四町 あと・おどいあ 跡・御土居跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしきょうみなみおおい 西ノ京南大炊 みかどちょう 御門町 32-32	26100	1 149	35度 01分 07.6秒	135度 43分 47.7秒	2022年 6月6日 ～ 2022年 7月8日	224 m <sup>2</sup>	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京一 条三坊四町跡 ・御土居跡	都城跡 土塁跡	江戸時代初頭  鎌倉時代～ 室町時代	濠  流路 溝 土坑	陶磁器  土師器 須恵器 瓦質土器 陶磁器 瓦		鎌倉時代から室町時代の道祖大路東側に掘削された人工河川（道祖大路川）と、豊臣秀吉が築造した御土居濠を検出した。御土居濠では川肩に護岸施設が設けられているのが認められた。		

文化財サービス発掘調査報告書 第26集

平安京右京一条三坊四町跡・御土居跡  
発掘調査報告書

発行日 2022年11月30日

株式会社 文化財サービス  
編集 〒612-8372 京都市伏見区北端町58  
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社  
印刷 〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る  
TEL 075-256-0961